



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペー・ヤー・チャアダーエフ「哲学書簡」(翻訳及び解説) IV
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Description	かくも絶えざる動乱や, うちつづく戦争・陰謀・犯罪・愚行の中にあつて, イタリアなどのキリスト教諸国においては, なにゆえにかくも多くの人びとが有益にして楽しき学芸を発達させてきたのであろうか。かかることは, トルコの支配する国々においては見られぬところである。
Citation	スラヴ研究, 9, 43-85
Issue Date	1965
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4976">https://hdl.handle.net/2115/4976</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113201.pdf



# 哲 学 書 簡

ペー・ヤー・チャアダーエフ

外 川 継 男 訳

## 《第 六 書 簡》<sup>1)</sup>

かくも絶えざる動乱や、うちつづく戦争・陰謀・犯罪・愚行の中にあつて、イタリアなどのキリスト教諸国においては、なにゆえにかくも多くの人びとが有益にして楽しき学芸を発達させてきたのであろうか。かかることは、トルコの支配する国々においては見られぬところである。

ヴォルテール、《Essai sur les moeurs》

奥 様

今まで私の書きました手紙をごらんになられて、うちつづく時代の中に思想の動きをしっかりと把握することが、どれほど大切なことか、あなたにもおわかりいただけたと存じます。しかし、あなたはそこにもうひとつ別の思想をも見出されたにちがいありません。なぜならば、神が虚無の中から引き出されて、みずからの御手でもって人間精神の中に入れられた真理にほかならぬこの根本的な思想を、もし人が確実に理解しているならば、何世紀にもわたる時代の歩みを、卑俗な歴史学が理解するようには決して考えないだろうと思われるからでございます。このように考えますならば、神の摂理、もしくはまったく賢明なる理性が、もろもろの出来事を支配しているということだけでなく、それが未だ人間精神の上にもたえず直接に働きかけているということも明らかになりましょう。事実、もし人が、人間理性が行動するためには、それ自身の本性に由来せぬある衝撃を、そもそものはじめに受けることが必要であり、<sup>2)</sup> また彼の最初の思想、最初の知識というものも、至高の理性から奇蹟的に伝達されたものにほかならないということを認めるならば、<sup>3)</sup> 人間の理性をこのようなものとして作った力は、理性に最初の行為を起こさせた時とおなじ働きを、その発達の全過程においても、たえず理性の上に及ぼしてきたにちがいない、ということが言えるのではないのでしょうか。

奥様、もしあなたがわれわれが先に認めましたところをしっかりと理解されておいで

1) すでに解説(1)において述べたように、本書簡および次の第七書簡は、ゲルシェンゾンの編集せる *Сочинения и Письма П. Я. Чаадаева* の中に、誤って第二・第三書簡として発表されたものである。このゲルシェンゾン版の中には、フランス語の原文とロシア語訳の双方がおさめられてあるが、以下の翻訳はロシア語訳を参照しつつ、フランス語の原文から直接なされたものである。「スラヴ研究」No. 6, P. 70参照。(訳注)

2) チャアダーエフはこのような考えを、先の第四・第五書簡の中でくわしく論じている。(訳注)

3) 第二書簡以下参照(訳注)

でしたら、知的存在というものを時代の流れと発展の中でこのようにとらえる考え方はあなたにとってさらに親しみぶかいものとなるに相違ありません。純粹に形而上学的な考察を通して、あなたはある外的な作用がたえず人間精神の上に働きかけるのを見てこられました。しかし、この場合に形而上学に依拠するということは、必要ですらなかったのです。と申しますのは、以上の考察の結論は、それ自体異議をさしはさむ余地のないものであり、もしこの結論を否定するならば、それが引き出された前提をも否定しなければならぬことになるからです。さて、もし人がこの精神的世界における神の理性のたえざる作用の仕方について深く思いをこらすならば、たった今見ましたように、この働きかけはその最初の作用に一致するに相違ないということのほか、それは人間精神が自由であり、かつ十分に活動しうるような、作用の仕方をするにちがいないということもわかることと思います。ですから、この神からの最初の伝達が、ある民族にあっては他の民族におけるよりも純粹に伝統として保たれているということや、この精神的世界の基本的な事実をいわば復活させるような人びとが時として現われたということは、なんら驚くに価しないことなのです。もしもこのような民族や選ばれた人たちを否定するならば、人類の歴史の全時代を通じて、すべての民族、すべての個人に対して、神の思想がおなじように完全に、おなじように鮮明に示されてきたと仮定しなければなりませんし、さらに知的世界におけるすべての個性、すべての自由をも否定することとなって、その論拠を失うことになりましょう。申すまでもなく、個性や自由というものは、知能や精神力や知識の相違があって、はじめて存在するものです。そしてこのようなものが、ある特定の個人や民族や幾人かの孤立した人びとに、特に保持すべく託されていて、彼らが人間精神の中に最初に植付けられた真理に対して特に自由であり、伝統に対して格別に恭順であると考えすることは、他の民族や個人が失ってしまったある種の知識を、ある民族やある個人が未だ保持しているという、現にわれわれの目の前でたえず見られる事実と完全に類似した一つの精神的事実を認めることにほかなりません。

この偉大な伝統は、人類の他の一部においても、その民族のおかれている立場の相違にしたがって、多少の差こそあれ、純粹に保たれてきました。そして人間は、自己のものには非ざる他の理性が、みずからの頭脳の中に生んだところのこの力強い真理の松明に照らされてのみ、自己に定められた道を歩んで来たのです。しかし、この光の中心は、この地上にはただ一つしかありませんでした。たしかにこの光は、人間の知識のような輝きかたをすることもありませんし、目をあざむくような強い光を遠くまで投げかけることもありません。それはただ一つの点に集中し、この世のすべての偉大な神秘と同様に、輝いてはいるものの目には見えず、赤々と燃えてはいるのに生命の火のようにかくされているものなのです。しかし、すべてのものは、たとえみずからの光で輝いているように見えても、また正反対の方向を目差しているように見えても、いずれもこの筆舌に尽せぬ光によって照らし出され、共通の中心を志向しているものなのです。<sup>4)</sup> しか

4) この中心がどこにあったのか、その正確な地点をこの地上にさがし求めても、それは益のないことでしょう。ただ確実なことは、世界中のあらゆる民族の伝統は、人間の最初の知識というものが、この地球上のおなじ地域から発しているということをごぞって示しています。(原注)

## 哲 学 書 簡

し、知的世界に大いなる破局がおとずれた時、人間によって作られた空しい力は一瞬にして消え去り、大火災のあとにただ一つすくとして立ち残ったものは、永遠の真理の幕屋だけでありました。歴史の宗教的統一性というものは、まさにこのように理解されるべきであり、またそれはこのように理解されてのみ、知的存在も他の創られたものと同様に普遍的な法則に従うということを示す、現代の真の哲学にまで高まることのできるのです。奥様、私はあなたが歴史というものを、このように深く、抽象化された見方で理解されますよう、心からのぞんでおります。歴史を支配し人類をその最終的な運命へと導く神の摂理をこのように理解することほど、私たちの思想を高め、魂を純化するものはないからです。

しかし何よりもまずはじめに、私どもはあの輝く曙の如き光を人類の記憶の全分野に投げかけるような、ひとつの歴史哲学を作るべく努力しようではありませんか。たとえ将来において、何ものかがわれわれの進歩をはばむことがあるとしても、もしこの歴史の準備的研究がわれわれにとって文字通りの満足のゆくような完全な理論を生み出すことができるならば、この研究はわれわれにとってもそれだけみり多いものになることでしょうから。しかし奥様、私がこのような考えをあなたに向って申しているのが、決して高い講壇の上からなどではなく、またこれらの書簡が、私たちの中絶した対話のつづきにほかならないということ、どうか思い起して見て下さい。私にとりまして、あなたとの話し合はじつに楽しいひとときでしたし、だれか他人との閑談を心からのぞんでいたあの頃の私にとりましては、それが真の慰めでもあったと重ねて申し上げたいのです。ですから、私が今回はいつもより教えさとするような態度をとっているとはお考え下さいませぬように。そしていつものように、奥様御自身のお考えで、この考察の足らざるところを補って下さいますようお願いする次第でございます。

奥様、あなたは多分人間精神の現下の傾向というものが、あらゆる種類の知識に歴史的形態をまとわせることにあるという点に、すでにお気づきのことでしょう。歴史的思惟の哲学的基礎についてふかく思いをこらすならば、今日ではこの歴史的思惟というものが、如何なる時代よりもはるかに高いところに到達していることは認めざるをえませぬ。また今日知性が満足しているのは、もはや歴史的領域だけだと申してもよいかと思えます。しかし、知性は今や過ぎさった時代についてのみ、たえず思いをはせているのであって、何世紀もの間自分を導いてくれた力を研究したり、自分が歩んできた道を静かにふりかえったり思い出したりして、みずからに新しい力を与えようと努力することはなくなっています。科学が示すこのような外観は、たしかに幸せなものでしょうが、今やこの狭い現在の中から人間の理性によって引き出された力が、決して理性全体を構成するものではないということを理解しなければなりません。そして、人間理性の中にはもう一つ別の力があって、それはただ一つの思想の中に、過ぎさった時をも約束された時をも寄せ集めつつ理性の真の存在を形成するとともに、理性に真の活動の場を提供するものであることを認めなければなりません。

しかし奥様、あなたは歴史叙述というものが、人間の記憶の中に残ったものしか含んでいないものであり、必然的に不完全なものであるということにお気づきではないでし

ょうか。もとよりすべてのできごとが、人間の記憶の中に残っているわけではありません。したがって、現在の歴史観が理性を満足させえないであろうことも明らかです。批評家の有益な仕事や、最後には喜んで助力せんとする自然科学の援助にもかかわらず、現在の歴史観は、未だかの統一性にまで到達することもなく、また歴史の歩みの一般的法則をしっかりと理解することから生ずる高い道徳性にまで達してもいないのです。人間精神は、過ぎさった時代についての深い考察の中に、常にこの偉大な成果を渴望してまいりました。しかし、いろいろなやり方で歴史の研究から引き出された安易な教訓や、月並な哲学的教え、また世間の人びとに鳴物入りで喧伝されたさまざまな美德の例、さらに世の貧弱な喜劇を不滅のものにするだけで、一人の紳士をも生むことなくもっぱら多くの悪人や愚か者を生み出すだけの歴史の陳腐な教訓など、すべてこういったものは、人類の伝統が理性に与えるべく予定していた真の教訓から、理性をそらせてしまったのでした。しかし、当時の歴史批判は、未だそれほど進歩してはおらず、特に原始時代に関する諸事実は、未だ人類の記憶の中において、あまりにも歪められたままになっていたので、宗教的な光といえどもこれらの深い闇を一掃することはできず、歴史もまた至高の光によって照らされていたとはいえ、手さぐりで進むほかなかったのでした。しかし、今日では以前とはちがって、歴史々料に対する取り扱い方は、より確実な成果を生み出すかのようになっています。時代の理性もまったく新しい歴史哲学を要求しております。しかしてこの新しい哲学は、現代の天文学者の正確な観測がヒッパルコス<sup>5)</sup>など古代の天文学者の<sup>きしん</sup>晷針による観察とは似ても似つかぬように、現在の哲学とはもはやまったく異なるものとなることでしょう。ただ、次の点には注意しなければなりません。即ち、今後ともすべてのものを証明するために十分な事実はないであろうということと、モーゼとヘロドトスの時代から、あらゆることを予言するのに必要な事実はこと欠かなかったということです。ですから、如何に事実を寄せ集めてみても、それだけでは、これらの事実を分類し、理解し、秩序づけることができるような、確実性まで到達することはないのです。このことは、たとえば幾世紀もの経験はケプラーに天体の運行の法則こそ教えました、自然に関する一般的な法則を教えることはできず、これが発見されるためには、周知のように敬虔な瞑想から生まれた特別な啓示が必要だったということからも明らかです。<sup>6)</sup>

むなし知識の積み重ねが、あれこれと示す、時代や民族の比較というものは、まずもってどのような意味を持つものなのでしょうか。言語や民族や思想の系譜を調べることに、どんな意味があるというのでしょうか。頑迷なる哲学は、時代と時代のあの驚くべき交錯を、人間の特質は決して変ることがないのだという言い古された主張によって片付けようとでもいうのでしょうか。あるいはまた、神の摂理のあとをたどることもなく、人間独自の力以外の原動力をたずねることもなしにこの問題をば、あの人間精神の自然な発展というお好みの理論によって回避することができるとも考えているのでしょうか。かかる哲学にとって、人間精神とは、転がりながら大きくなってゆく雪だるま

5) 古代ギリシャの天文学者(190? - 125? B.C.)。ロドス島で天体観測をおこない、春分、秋分、太陽軌道の歪み、月の運動の不均等性などを発見した。(訳注)

6) 第四書簡におけるニュートンの評価を参照。(訳注)

## 哲学書簡

の如きもので、決してそれ以上のものではありません。この哲学は、至るところにおいて人間に固有の自然な進歩や完成を見ていると称していますが、つまるところ動機も理由もない運動しか見ていないのです。これはまた、みずからのさまざまな精神の特質にしたがって、あるいは暗く絶望的に、人間をば日向を飛びまわる蚊の如き愚かなものと考えたり、あるいは希望的に、また報償をあてにして、人間をその崇高な本性によって常により高く向上せんとするものと考えたりしますが、その対象とするところは常に人間であって、決してそれ以上のものではありません。この哲学は、みずから無智を求めているようなものです。自分がよく知っていると思いつけている物質的世界も、精神と感覚に対してむなしい好奇心を満足させるだけであって、それ以外の何ものも彼に教えることはないのです。この世界が、みずからの内部からたえず発している偉大な光も、かかる哲学にまで到達することはありません。そしてこの哲学が、事物の歩みの中に計画や意図や理由を見てとって、人間の知性をそれらに従わせようと決心しても、また精神的世界の普遍的な現象に関連して生ずるあらゆる結果を受け入れようと決心してみても、それは不可能なことなのです。したがって、如何に時代と時代をつなぎ合わせてみても、またいろいろな史料をいくら調べてみても、そんなことはなんの役にも立たないのです。必要なことは、歴史上の偉大な時期の精神的特質を明らかにすべく努力することであり、実際の理性的な法則に則って、各時代の特徴を厳密に規定するように努めることです。しかし、よく考えてみるならば、歴史資料のほとんどすべては、今日までに掘りつくされ、各民族の伝統もまた、ほとんどすべて語られてしまったことに気づくことでしょう。いつの日にか、過ぎさった時代が今までよりも明らかになるとしても、(おそらくそれは諸民族の古き埃をかき立てることしかできぬ、かの歴史批評などによるものではなく、純粹に論理的な他のなんらかの方法によってなされることでしょうが) 厳密な意味での事実に関して言うならば、もはやそのほとんどすべてが発掘されてしまって、今日歴史学に残されていることといえば、沈思黙考するだけだということも明らかだと思えます。

以上のことが認められるならば、歴史哲学は全哲学体系の中で、当然みずからの地位を占めることになりましょうし、今後はその不可欠な一要素ともなることでしょう。そうなれば、もちろん多くのことがらが歴史哲学から離れて、物語作家や詩人の手に委ねられるようになるでしょうが、歴史哲学が新しい体系の頂上に位置した際には、さらに多くのことがらが、現在の黒雲で覆われている環境から抜け出て、はっきりと現われてくることでありましょう。これらのことがらの真の性格を、年代記だけによって明らかにすることは、もはやできません。観察や実験が自然哲学の原理を発見したとはいえ、それらを公式や方程式にまとめあげたのが幾何学的精神であったように、今後これらのことがらに確実性の烙印を押すものは、形而上学的な理性でありましょう。しかしてこれらのことがらが何かと申すならば、それはたとえばわれわれによってきわめて不十分にしか理解されていない(それも史料や記念碑が欠如しているためというよりは、思想が欠如しているために) あの人類の全過去が全未来とそこにおいて合流するような時期、あらゆる時代がそこに帰着し、すべてが終ってすべて始まるような時期——即ち、

キリスト紀元の最初の時期だと言えるかと思えます。いつの日にか、深い歴史的省察が古代の人類の栄光が消え去って偉大な未来が花咲かんとするこの時期を取りあげざるをえないような時が来ることを、私は疑いません。このような歴史的省察の対象となる時期はまた、あの人間復活の時代に続き、それを継承するところの長い時期でもありましょう。この時期にあっては、その少し前まで偏見や哲学的狂信が未だきわめて誤ったイメージを持っていましたし、輝かしい光は厚い闇の底にかくされ、あらゆる力が未だ発揮されぬまま、精神の明らかな不動の状態の中にとどまっていた。しかしてこの時期について人びとが理解し始めたのは、ようやく歴史研究が新しい方向をとるようになってからのことなのです。

やがては現在多くの歴史上の人物の中に没している偉大な人たちが、みずからを取り巻いている闇の中からその姿を現わすようになるとともに、他方、人びとがかくも長きにわたって愚かにも誤った尊敬を払ってきた著名な人物たちが、永久に虚空の中に消え去ることでありましょう。しかしてこれらの人物としては、とりわけ現在まで人間理性によって無視ないし軽視されてきた幾人かの聖書中の人物が取りあげられることでしょうし、また従来必要以上の栄光を与えられてきた幾人かの異教徒の賢者たちが問題とされるかも知れません。たとえば、モーゼとソクラテス、ダヴィデとマルクス・アウレリウスといった人びとがそれです。しかしてこのことは、モーゼが人間に真の神を与えたのに対し、ソクラテスが残したものといえ、臆病な懐疑でしかなかったということ、またダヴィデが聖なる英雄的行為の完全な典型であったのに対し、マルクス・アウレリウスは、結局のところ単なる人為的な偉大さと虚栄心にもとづく美德の奇妙な一例でしかなかったことを考えれば、明らかになることと思えます。同様に、今後もし人が、あのみずからのはらわたを引き裂いたカトー<sup>7)</sup>を思い浮かべるとしたら、もはやそれはこの狂気じみた徳が吹き込んだ哲学と、人間がみずからに作り出したあの悲惨な偉大さを、額面どおりに評価せんがためにほかならないでしょう。私は異教徒の有名な人物の中でも、将来エピクロスの名は、彼に押された偏見の烙印を脱して、その思い出に対して新たな関心が払われるようになるのではないかと考えています。その他の名声に輝やく人物たちも、同様にそれぞれ新しい評価をうけるようになることでしょう。たとえば、スタゲイリテス<sup>8)</sup>の名前が、もはやある種の恐怖をもってしか口にされなくなるのに対し、マホメットの名は、深い尊敬の念を起させるようになるでありましょう。前者が、人間のあらゆる善の力を何世紀もの間おさえつけてきた闇の天使と考えられるようになるのに対し、後者は、その聖なる叡智によって、人類の救済のために予定された計画の達成にもっとも寄与した、慈悲ぶかい存在と見なされるようになることありましょう。最後に、あえて申すならば、あの偉大なホメーロスの名前に対しても、ある種の低い評価が下されるようになるかも知れません。そして、この人間を墮落にさ

7) ローマの政治家、ウティカのカトーのこと。ローマの内乱に際して、元老院側を支持してカエサルに抗し、ウティカにおいて自殺した。(95~46 B.C.) (訳注)

8) 古代マケドニアの都市スタゲイロスの人ということから、この地に生まれたアリストテレスをさす。(訳注)

そう人物に対して、その宗教的本能からプラトンが与えた評価というものが、彼の空想的な考えのあらわれであるとはもはや見なされなくなり、人類の将来の思想に対するすばらしい寄与の一つと考えられるようになることであろう。かくも恐るべきやり方で、人間の性質を墮落させたこの罪ある誘惑者を思い出すたびに、顔を赤らめずにはいられなくなる日がきつと来るにちがいありませんし、また、人間のもっともいやしい情熱におもねるこの人物に対し、人びとがおしみにく賞讃を与えたことを、いつの日にかきつと後悔する日が来るに相違ありません。彼は人びとを喜ばせるために真理の神聖な伝統を汚すとともに、人間の心をけがらわしきもので一杯にしたからです。これに対し、現在までのところ人間精神のほんの表面をかすただけか、あるいはせいぜい何人かの独立した知性の持ち主の中に死んだように眠っている偉大な思想は、今後すべて人類の道徳的感情の中で確固たる地位を占めるようになるでしょうし、いわば常識的な自明の理ともなることでありましょう。

以上のように考えるならば、歴史の教えるもっとも重要な教訓の一つが、人間精神の記憶の中に、世界史の舞台からすでに消え去った一連の民族を、それぞれしつかと固定するとともに、現存の諸民族の意識をば、彼らが果すべく運命づけられた使命感で満たすことにあるということも理解されたことと思います。もし各々の民族が、自分の過去のいろいろな時期についてしつかと理解するならば、現在の生活のあらゆる真相についても理解できるようになりましょうし、さらには将来みずからがたどるべき道をも、ある程度は前以て知ることができるようになることであろう。このようにして、あらゆる民族の中に、幾つかの確実な思想や、みずからの思い出の中から引き出された明白な真理や、すべての精神を多少なりとも支配しそれらを同じ目的に向って押し進めるような深い確信から成る、真の民族意識が形成されることでありましょう。その時になれば今まで民族と民族とを引き離していたにすぎない民族性というものも、その理性の曇りや偏見に満ちた利害を脱して、一つの調和のとれた普遍的な成果を生み出すべく互いに結合するようになり、諸民族が、人類全体の利益——それはよく考えてみれば各民族の利益にほかならないのですが——という正しい自覚の下に互いに手を差しのべ合う姿もおそらく見られることになりましょう。

私はこの知性の融合というものが、現在の識者によって、哲学と知識全般の進歩に期待されているものであることを知っています。しかし、もし人が民族について、たとえそれが複合的な存在であっても結局は個人と同様に精神的な存在であり、したがって各民族の知的生活についても個人の場合とおなじ法則が支配しているということをよく考えてみるならば、人類大家族の活動もまた必然的に個人的感情に依存しているものであることがわかることと思います。そしてこの感情は、各々の民族をしてみずからが他の人類と切り離された独自の存在であり、自己自身の利害を持つもののように思いこませています。上のように考えるならば、この感情もまた普遍的知性に不可欠な一要素であって、集団的存在のいわば自我を構成するものであることもわかるでしょうし、したがって、もしわれわれが将来の幸福と無限の完成とを望むならば、人類の中で偉大な個性を持つ民族と、より小さな個性を持つ民族とを切り離して考えることができないという

ことも、さらに後者をば、人類がより完全な状態に到達するためにあらかじめ与えられたところの要素ないし手段として受け取らなければならないということも理解されるであります。

したがって、哲学の主張するコスモポリタンな未来とは、一つの幻想でしかありません。まずはじめになすべきことは、政治的モラルとは異った、各民族がその内部に持っているモラルを研究して、それがいかなるものであるか要約することです。また各民族も、個人と同様みずからを知り、みずからを評価することを学ぶことが必要です。自分自身の長所と短所を知らなければならないわけです。そして、自己の犯した誤りを悔悟し、罪をつぐない、あくまでも善の道を進むことを学ぶべきであります。このことこそ、すべての個人にとってと同様に、集団にとっても真の完成へ到達するための第一の条件だと思えます。個人も民族も、自己の過去を反省することによってこそ、みずからの使命を果すことを学ぶのであり、自己の過去をはっきりと理解してこそ、未来に働きかける力を見出すことができるのです。

このように考えるならば、歴史批評とは、もはや単に好奇心を満たすためのものではなく、もっとも厳格な裁判官たるべきことがおわかりになられましょう。そしてそれは、あらゆる時代の知名の士や傑出せる人物に対し仮借なき判決を下し、すべての名声や栄光を綿密に吟味・検討するとともに、すべての歴史的偏見や権威を正すべきものなのです。かくて理性の前に過去がその真の姿を明かにするならば、歴史批評はそこから現在との関係において、幾つかの確実な結果を引き出し、自己の前にひろがる無限の未来を確信をもって眺めるべく、人類の記憶を満たしている誤ったイメージを破壊することに専念することでありましょう。

その時が来れば、あれ程偉大なギリシャの栄光も、ほとんど完全にその姿を消すであろうと私は信じています。そして、かくも長きにわたって欺瞞の天才たちが地上に誘惑と嘘偽とを広めてきた、いつわりと迷いに満ちたこのギリシャの土地を、道徳的思考が聖なる悲しみの目で眺める日が来るであろうことを私は疑いません。その時になれば、フェヌロン<sup>9)</sup>の如き純粋な魂が、かつて人間が陥った恐るべき墮落から生み出された官能的な空想にふけるというようなことや、強力な知性<sup>10)</sup>が、プラトンの官能的な暗示に心をひかれるようなことも見られなくなることでしょう。そしてこれらの人物とは反対に、ほとんど忘れ去られてしまった宗教思想家や、幾人かの力強い思想家の古い見解が、予期されていなかっただけに、いつそう素晴らしいものに思われてくることでありましょう。これらの人びとこそ、新しい社会の黎明期において、一方の手で社会がたどるべき道をさし示すとともに、もう一方の手で、かの賢者たちが考え出した多神教という異様な怪物とたたかった英雄なのであります。これらの賢者たちは、神が人間の前に発せられた最初の御言葉を保持するように託されたにも拘らず、このような頻死の怪物

9) フランス聖職者、思想家、文学者。ボシュエの弟子として、デカルト主義者・自由思想家を論駁する《Réfutation du P. Malebranche》、《Démonstrations de l'Existence de Dieu》などを著わした。(1651～1715) (訳注)

10) シュライエルマッハー、シェリング、クーザン等々 (原注)

## 哲学書簡

を考え出したのでした。かくて人びとは、これら幾人かの英雄たちが持っていた独特の未来観の中に、とりわけ時代と時代との絶対的な結びつきについての内的な認識の表現を見出すことでありましょう。そして、彼らの予言というものが、事実上ある特定の時代だけに関するものではなく、すべての時代に一樣に関係のあるものだということもわかるでしょう。さらにまた彼らの予言が、精神的世界の法則が日ごと明瞭に示される如く、社会の連続的な発展段階の中で実現されてゆくのを認めるためには、いわば自分自身の身のまわりを見さえすれば十分だということも理解されることでしょう。かくて、彼らの予言したことがらは、現実になれぬを動かしているもろもろの出来事とおなじように、われわれにとって感知される場所となるべきであります。<sup>11)</sup>

このように歴史を理解するならば、われわれの考えでは、歴史の示唆するもっとも重要な教訓とは、以下の如きものと思われれます。そしてこの歴史的教訓というものは、われわれの見解によれば、そののみが人類の謎をときあかすことのできる（人間という）知的存在の普遍的な生活を明らかにすることによって、全歴史哲学を概括するものでもあります。すなわち人びとは、全時代の経験によってかくも明瞭に否定されてきた、われわれの本性の機械的な完成という愚かな理論に満足する代りに、次のことを知るようになるでしょう。つまり、人間というものは、完成とは反対に、無限の墮落の道を歩んできたということ、そして、あらゆる民族の中に時として進歩の時代があり、人間の普遍的な生活の中に目覚めた時期があったとしても、また理性の素晴らしい飛躍の時期や、人間本性の驚くべき努力の時代があったことは否定できないとしても、社会生体として、永遠にして持続的な前進を示すものは何もなく、しかして、真の上昇運動や確固として継続する進歩の本当の原理が認められるのは、われわれがその成員として加っているとはいえず、決して人間の手で作られたのではない社会においてだけなのだとすることです。疑いもなくわれわれは、自分たちより前に古代の賢者らが見出したところを取り入れ、そこからみずからの利益になるものを引き出すことによって、かの野蛮人どもが断ち切った、時代時代の偉大な鎖をつなぎ合わせてきました。しかし、このことからして、古代世界と近代世界とを分けへだてている歴史現象が——それはあらゆる以前のものから完全に切り離され、社会の中における人間の思想の自然な継承や、事実のあらゆる必然的結びつきの外にあるものなのですが——たとえなかったとしても、諸民族は現在の状態にまで到達したかも知れないということには、決してならないのです。

奥様、もしも将来において、賢明なる人の目が過去に向けられるならば、あの超自然的な力がまったく新しい方向を与えた時のこの世界は、腐敗し、血にまみれ、いつわり満ちたその真の姿を彼の目の前に示すことでしょう。そして、自分たちがあれほど

11) この様になれば、もはや人びとは、たとえばつい先頃までやっていたように、あの偉大なバビロンを、この地上のあれこれの強国の中にさがし求めるというようなこともしなくなるでしょう。むしろ、自分自身が、このバビロンがすさまじい音をたてて崩壊してゆくただ中に生きているように感ずるに違いありません。即ち人びとは、われわれにこの恐るべき崩壊を語った後世のすぐれた歴史家たちが考えていたことは、単にある一つの強国の没落だけではなく、現にわれわれが見ているこの物質的社会一般の没落であったということも、理解するようになることでありましょう。（原注）

賞讃していた諸民族や各世代の進歩というものも、結局のところ、われわれが未開野蛮な民族と呼んでいるものよりもはるかに劣った状態へと、彼らを導いたにすぎないのだということを知ることでしょう。しかし古代世界の文明がいかにも不完全なものであったかを認めるとともに、そこには、いかなる確固とした永続的な原理もなかったのだということをも見出すことでありましょ う。あの深遠なエジプトの叡智も、心を魅了するイオニヤの優雅さも、厳格なローマの徳も、まばゆいばかりのアレクサンドリアのはなやかさも、いったいどうなってしまったのでしょうか。すべての栄光や偉大さや、世界支配や地上におけるもっとも強大な権力や、<sup>12)</sup> 世界帝国と結びついて地上のすべての権力を子守唄にして育ててきた、あの古く輝やかしい文明が、いったいどうして滅びることがあり得たのでしょうか。しかも、これら何世紀にもわたる努力にはまったく関与していなかった新しい民族が、ある日どことも知れぬ所からやって来て、その廢墟の上に鋤をひくためにこの壮大な建物を破壊し、これらすべてをひっくりかえしたのだとするならば、これら何世紀にもおよぶ知性の素晴らしい努力は、いったい何を目差していたことになるのでしょうか。人びとは自分のなしたすべてのことが、将来水泡に帰するのを見るために、その仕事をなしたとでもいうのでしょうか。あらゆるものをただ一日にして失わんがために、かくも多くの蓄積をはかり、はるか下へと落ちんがために、かくも高きへ登ったのでありましょ うか。

しかし奥様、誤解してはなりません。古代世界を滅ぼしたのは、決してかの野蛮人ではなかったのです。古代世界は、すでに腐敗した死骸であって、彼らはその灰を風に向かって投じたばかりのことでした。以前にこのおなじ野蛮人が攻撃をかけたとき、彼らはいかに傷一つ負わなかったではありませんか。事實は、その時まで人間社会を存続させてきた生命の原理が枯渇してしまったのであり、社会の動きを決定してきた唯一のものである物質的利害が——あるいはそう言いたければ、真の利害といってもよいかも知れませんが——いわばその任務を果し、人類の予備的教育をなしとげてしまったということなのです。つまり人間精神は、如何にこの地上の枠の中から抜け出したいと努力してみても、社会的存在の真の原理が存在するいと高き所までは、時として達し得ただけであって、その結果、社会に対して終局的な形態を与えるということは、ついに出来なかったのです。

われわれはあまりにも長い間、世界の中の個々の国だけを見ることに慣れてきたので、この新しい社会の古い社会に対する圧倒的な優越性というものを、未だ適切には評価してきませんでした。また、この社会が何世紀にもわたって真の封建制度を形成してきたということ、そして、この制度が亡びたのは、もっぱら宗教改革によるものだという事を考えませんでした。さらにまたわれわれは、この封建制度の没落という悲しむべき出来事の以前には、ヨーロッパ諸民族は、みずからを地理的に分かれている幾つかの国から成る社会的統一体というよりは、精神的見地から見て一つの統一体だと考えていたのだということを見のがしてきました。そして、これらの諸民族の間には、ながいこと教会の命ずること以外に如何なる一般的な法も存在しなかったということについて

12) アレクサンドリア、セレウコス王朝、マルクス・アウレリウス、ユリアヌス、プトレマイオス王朝等々。(原注)

## 哲学書簡

も考えませんでした。また当時においては、戦争は内輪のあらしいと見なされていたということ、そして最後に、ただ一つの利害がこの世界全体を馳り立て、ただ一つの方向へと導いていたということ、われわれは見のがしてきたのでした。中世史というものは、文字通りただ一つの民族の、即ちキリスト教民族の歴史なのです。しかしてこの社会の基礎をなしていたものは、倫理的な思想の動きであって、純粹に政治的な出来事は単に二次的な地位を占めていたにすぎませんでした。このことを何より証明するものは、前世紀の哲学があれほど嫌っていた、思想上の相違に由来する戦争であります。いみじくもヴォルテールは、キリスト教徒の間においてのみ意見の相違が戦争の原因たりうるといっています。しかしこの見解をそのまま受け入れるだけでなく、どうしてそうなのかという理由にまで立ち入る必要があります。もしこの世界において、思想の支配が確立するとするならば、それは、この思想の原理そのものに現実性が与えられているからにはほかならないということは明らかです。しかして現在の状態に関して申すならば、あの思想的統一と社会的統一を破壊した教会分離の結果、一見社会の外観は変化したように見えますけれど、その根底は疑いもなく同一であって、何をなそうと何を言おうと、それがキリスト教的社会であることにかわりありません。勿論ヨーロッパが、その青春時代や成長期に戻るといえることは、もはやありますまい。しかしいつの日にか、ヨーロッパの諸民族を切り離しているこの境界線が消え去り、近代社会の根本原理が、新しい形態の下でかつてなかったほどの力をもって、再び現われるであろうことは疑い得ません。このことは、キリスト教徒にとっては信仰の問題であります。彼らにとって、この未来を疑うということは、みずからの信仰が立脚している過去を疑うことができないのとおなじように、許されないところなのです。しかし、すべての真摯な精神にとって、このことは証明ずみのことがらなのです。はたしてこの日が、人びとの考えているほど近くはないと、いったい誰が言えましょうか。今日人びとの精神の奥底には、ある驚くべき宗教的ないとなみが行われていますし、現代において最高の力を持っている科学の歩みの中にも、過去への復帰の動きが見られます。すべてこういったことの中には、現在信仰上の確信にすぎないものを、常識的にも確かなものに代えようとする、ある普遍的な動きを人間の中に惹きおこすような、何か偉大な社会現象の前兆が見られないとは決して申せません。さいわいなことに、宗教改革はすべてのものを破壊したわけではありませんでした。そして、キリスト教世界の上にこの厄災がおそった時には、すでに社会は神の加護によって、永遠の未来のためにすっかり築きあげられていたのです。

したがって、われわれが新しい社会の真の性格を研究しなければならないのは、あれこれ個々の国についてではなく、ヨーロッパという一家を形成しているこの偉大な社会の中においてなのであります。そしてこの社会の中にこそ、近代世界を古代世界から区別するところの、揺ぎない進歩の真の要素が存在しているのです。また、あらゆる歴史の偉大な光が見られるのも、この社会の中においてなのです。われわれは、たとえば、この新たな社会があらゆる革命を経験したにもかかわらず、その生命力を失わなかったばかりか、日ごとその力を増し、この中では毎日のように新しい力が生み出されている

ことを知っています。さらにまたわれわれは、アラブ人やタタール人やトルコ人が、この社会を滅ぼすことができなかつたばかりか、反対にこれを強固にただけだということも知っています。ところで、このアラブ人とタタール人がヨーロッパをおそったのが、まだ火薬が発明される以前だったということは、注意しなければならぬところです。つまり、新しい社会を崩壊から救ったのは、決して鉄砲などの火器ではなかつたということ、またこれら三つの民族の中の一つがヨーロッパに侵入したのは、古代世界の中の二つの世界がまだ残存していた時だったということは、注目に価するところです。<sup>13)</sup>

人びとは通常、ローマ帝国の衰退の原因を、その風俗の頹廢と専制政治とに帰しています。しかし、この全世界的な大変動においては、決してローマだけが問題ではありませんでした。つまり、亡びたのは、ひとりローマだけでなく、全文明だったからです。ファラオのエジプト、ペリクレスのギリシャ、プトレマイオス朝のエジプト、インドにまで達したアレクサンドルの全ギリシャ、さらにギリシャ化したユダヤそのものまで、すべてこれらのものが全ローマの中にとけこみ、単一の社会を構成していました。しかしてこの社会こそ、当時までに人間性の中に発達したあらゆる知的・精神的力を含むものであって、はるか原始時代からの全世代を代表するものだったのです。従って、亡ぼされ、しかしてその亡ぼされた次の日から再び復活をはじめたのは、決して一帝国だけではなく、人間社会そのものだったわけです。地球がいわばヨーロッパによって包囲され、大西洋から生まれ出た新しい世界がヨーロッパによって再建され、ヨーロッパ以外の諸民族がヨーロッパ国民のためにだけ存在するような従属的なものになって以来、古い建物が朽ち落ちて新しい建物が奇蹟的にそれに代るものとして立ち現われた時に、こ

13) インドやシナが、われわれに示す光景の中には、考えるべき多くの教訓が含まれています。今日われわれがみずからの周囲に、塵芥（の如き無価値な民族）しか見ることのない世界の同時代人たりえているのは、これらの民族のおかげなのです。このことの中にわれわれは、全能の神がその御手でもって他から新しい衝撃力を加えられることがない時に、人類がいったいどのようになるかを知ることができます。

羅針盤、印刷術、火薬という、人間の知性の進歩をもっとも促進したといわれる三つの偉大な器械をシナがずっと以前から所有していたという事実には注目せねばなりません。しかしてこの国は、これらのものをいったい何に用いたのでしょうか。はたしてシナ人は、世界一周を行ったり、新世界を発見したりしたのでしょうか。また彼らは、印刷術が発明される以前にわれわれが持っていたよりも多くの文献を所有していたのでしょうか。人殺しの技術についても、われわれのフリードリッヒやボナパルトのような人物が、はたして彼らのところに居たのでしょうか。ヒンドスタンについて言うならば、はじめタタール人に、ついでイギリス人に征服されることによって生じたあのみじめな状態は、至高の理性から直接由来した真理にもとずかぬすべての社会に固有の、あの無気力と生気の欠如をはっきりと現わしているように思われます。私には、人類のあらゆる知識の萌芽と、最古の自然な文明とを受けついで民族が示しているこの異常なまでの墮落には、未だ何らかの特別な教訓が含まれているように思われるのです。しかしてこのことは、如何なる理由にもせよ、人類の間に広く行きわたっている思想からなにつ引き出すこともなく、また一般的法則の働きに従うこともなしに、人類家族から孤立し、自己自身の中に閉じこもっている理性というものは、その行動が恣意的であればあるほど衰微せざるをえないという、われわれが個人の場合に日常見うけられる法則が、民族の集団的知性についても適応されるということを示しているのではないのでしょうか。事実、ある民族が掠奪の対象というあわれむべき状態に陥ったのは、決して他の民族によってではなく、自国内の不正な取引をする人間や、専制君主によってではなかつたのでしょうか。さらに、インド社会のこの前代未聞の衰微は、征服された結果であるというだけでなく、周知のように、そのはるか昔にまでさかのぼるものです。この国の文学や哲学や、さらにそれらを生み出した言語までもが、すでにずっと以前に存在しなくなった秩序に属しているのです。（原注）

の地上においていったい何が起きたかを理解することは、むずかしいことではありません。即ち、この時万物の精神的要素は、一つの新たな法則と、新たな構成とを得たのでした。この新しい社会の建設にあたって、古い社会のいろいろな材料が役立ったことは疑いありません。なぜならば、至高の理性がみずからの手で創造したものを破壊することはあり得ませんし、精神的世界の物質的基礎は、常におなじものであるに相違ないからです。しかしそれだけでなく、古代社会が発掘することのなかった地層からのまったく新しい人的資源が、神によって供給されてきましたし、北方民族の集中的で力強い知性が、南欧やオリエントの発展的な力と結びつくようになりました。このことは、あたかも、この地上に広く散在していた精神的な力が、この時まで人間の心の奥底にかくされてきた種々の要素をもった何世代もの思想に生命を与えるべく、この時を期して融合したかのように見えます。しかし、この建物の設計図も、これらさまざまな材料を結びつけるセメントも、人間の手になるものではありませんでした。すべてのことをなしたのは、真理の思想でありました。われわれはこのことをよく考えてみなければなりません。そしてこのことは、現代のあらゆる人間的思想をもってしても、純粹に歴史的な推論だけでは知性を満足させるようには説明することのできない、きわめて重要な事実なのです。あらゆる歴史社会は、このことを軸として回転しているのですし、ここにこそ、人類の教育の全現象を説明するものがあるのです。このできごとの偉大さは、それに先行し継続するすべてのものと内的・必然的に結びつくことによって、この事実をして、多少なりとも自発的で恣意的なところのある人間的行為の、通常の流れの外に置いています。しかし、このできごとが人間の知性の上に及ぼした直接的影響や、それが突如として知性を豊かにさせた新しい力、知性の中に呼び起こした新しい要求、さらに人間をして如何なる状態にあっても、真理を欲し、真理を知る能力があるものとなさしめたものによって作られたこの知性の驚くべき平均化、これらすべてのものこそ、この歴史的時点の上に、神の摂理と至高の理性のすばらしい性格をきざみつけているのです。かくて人間理性は、しばしばもはや存在せぬもの、あるいは存在し得ぬものへ復帰せんとするにもかかわらず、この時以降、常にその根本においてはこの歴史的時点と固く結びついてきたことに注目して下さい。今日この至高の理性の意識は、すべて新しい精神的秩序の中に入っているとは言えないでしょうか。さらにまた、他のすべての知性をひきつけている普遍的知性のこの部分は、キリスト紀元の最初の日に生まれたものであるとは言えないでしょうか。われわれと古代世界とをへだてているこの一線が、はたしてすべての人に見えるものかどうか私にはわかりませんが、道徳的感情によってはぐくまれ、知的本質の諸要素を分けるものと結合するものとを多少なりとも理解できるすべての人には、この一線は、たしかにはっきりと感じられるところなのです。人びとがまったく不当にも、文芸復興と呼んでいるあの十五世紀に起った異教への復帰の運動が、近代人の記憶の中において、もはや功成り名とげた人が若気のあやまちや恥ずかしい酔心地を思い出すようにしか、思い起されなくなる時が必ずや来ることでありましょう。

また人びとが、ともすると一種の錯覚から、古代がかぎりなく続く長い時代であり、近代がほんの昨日始ったばかりであると思こんでいることにも、注意して下さい。古

代世界の歴史は、たとえばギリシャのペラスギ族の時代にまでさかのぼったとしても、キリスト紀元後今日までの時代よりせいぜい一世紀ぐらいしか長くないのであって、歴史時代になると、それよりももっと短いものなのです。しかしてこの間に、古代世界にあっては幾つもの社会が亡びたのに対し、近代諸民族の歴史においては、国家間の地理的境界こそ変わっても、社会そのもの、民族そのものは完全に残っているのです！マウル人のスペインからの放逐とか、アメリカ原住民の絶滅とか、ロシアにおけるタタール人の全滅といった事実も、われわれの論拠を確証するだけのものであることは言うまでもありません。同様に、たとえばわれわれがすでに耳にしたオトマン帝国の瓦礫も、キリスト教国民であれば決して経験しないような恐ろしい破局を今後も示すことでしょうし、さらにわれわれの理論体系から遠く隔った非キリスト教諸民族にも、おなじような運命が待ちかまえていることでしょう。真理の全能な行為が及ぶ範囲とはかかるものであって、それはある民族を突きつけるかと思えば、他の民族をみずからの周囲に包含しつつ、たえず広がり、われわれを予言された時へと近づけているのです。

人びとが近代文明に対し、ながい間無関心でいたことは、驚くべきことだと言わねばなりません。しかし、近代文明について正しく理解することが、同時にあらゆる社会問題を解決することになるのだということは、あなたにもおわかりのことでしょう。歴史哲学が、そのきわめて広汎にして概括的な考察の中でも、好むと好まざるとにかかわらず、近代文明を問題にせざるをえないのはこのためなのです。事実、近代文明は、それ以前の全時代の成果を含むものであり、また来たるべき時代は、この文明の生み出すところにほかならないのではないのでしょうか。ところで、精神的存在というものは、時間によって作られるものであり、時間が完成するにちがいないものです。しかして、現代ほど世界中に広がった多くの思想が一つのことに集中している時代はなく、また人類の全歴史において、今日ほど一つの思想が人間のあらゆる活動範囲を占めるにいたった時代もありませんでした。しかしてわれわれは、まずもって、かつて人びとによって言われたりなされたりしたすべてのことを積極的に継承してきましたし、この地上には、われわれの思想の影響をこうむらなかつたところはなく、さらに、この世界全体を通じて、現代においてはただ一つの強力な思想が支配しているのです。ですから道徳哲学のあらゆる基本的な問題は、必然的に近代文明の問題という、唯一の問題の中に含まれることになるのです。しかし人びとは、人間の能力の完成とか、人間精神の進歩について大言壮語することによって、すべてを説明した気でいます。彼らはあたかも、人は決して停滞することもなければ、後退することもなく、たえず前進するものであり、また知性の歩みの中には発展と進歩だけがあって、停止とか後退とかいったものはないかのように考えています。しかしもしそうだとしたら、たった今私が語ったこれらの民族は、われわれが知って以来、どうして停滞しているのでしょうか。なにゆえにアジアの諸民族は沈滞の中に陥っているのでしょうか。彼らもまた今日の状態に達するためには、われわれと同様に行動し、探究し、発明し、発見しなければならなかったはずですが、では彼らはなぜひとたびある段階に到達したら、それ以後なに一つ新しいものを考え出すことが

できなかったのでしょうか。<sup>14)</sup> この解答はきわめて容易なものです。即ち、人間性の進歩は、人が考えるほど無限なものではなく、そこには決して越えることのできない限界があるということです。古代世界の文明が、必ずしも前進しなかった理由はここにあります。エジプトが、ヘロドトスが訪れて以来ギリシャの支配下に陥るまで、進歩を示さなかった理由もここにあります。また、ヘラクレスの柱<sup>15)</sup> からガンジス川にまで達するあらゆる知識をもち、あれほど美しく輝かしかつたローマ世界が、新しい思想が人間精神を照らし出した時に、純粹に人間的なあらゆる進歩を不可避免的に終らせるような停滞状態に陥ったのも、これとおなじ理由からでした。もし人が、かくも豊かな成果を生んだこの時代について、古典的な迷信を棄てて少しでも反省してみるならば、そこにこの時代の著るしい風俗的頹廢や、美德、自由、祖国愛といったあらゆる感情の喪失や、人間の知識のある分野におけるひどい衰微が認められる以外に、他のすべての分野においても完全な停滞が見られることに気付くことでしょう。そしてまた、もはや人びとはある一定の狭い枠の中でしか歩むことができず、そこから出ようとして愚かな混乱状態に陥ってしまったことにも気が付くことでしょう。つまり、人間は物質的利益が満たされると、もはや前進しなくなるのが真実であって、後退しなければ、それこそ幸いと言わなければならないのです。誤解のないように申しますが、ヒンドスタンやローマや日本の場合とおなじように、ギリシャにおいても、過去および現在における精神の働きは、いかに驚くべきものであったとは言え、常にただ一つのおなじ目的しか目差してこなかったし、現在でも目差していないのです。そこでは詩も哲学も芸術も、すべて過去においても現在においても、ひたすら物質的存在を満足させることしか考えてきませんでした。あの東洋のさまざまな教義や知的慣習の中に含まれているきわめて高尚なものも、この共通に見られる事実と反するどころか、むしろこの事実を確証するものなのです。なぜならば、われわれがかの地に見出す思想の無秩序な混乱こそ、だれもが知っているように、物質的人間の錯覚と幻想に由来するものだからです。しかし、だからといって、この昔からの人間のあらゆる活動の原動力であった物質的利害というものが、単に感覚的な満足だけに限られるものであると考えてはなりません。このような利害は、社会の發達の程度や、さまざまな地域的原因から、いろいろな形をとって現われるものです。しかし、それらは、いずれも単なる物質的満足の一般的要求にすぎないのであって、純粹に精神的な欲求にまで高まることは決してありません。真に思想的関心によって動かされるのはキリスト教社会だけであり、しかしてこの精神的関心こそ、近代民族の完全性の基礎をなすものであり、またここにこそ彼らの文明の神秘性があるのです。近代民族にあっては、いかに他の利害が生まれ出ようと、それらはすべてこの精神的利害という強い力に従属するものなのです。そしてこの力こそ、魂の全能力をしっかりと把握し、理性と感情の持つあらゆる力を利用しつつ、人間の中にあるすべてのものをみずからの使命を達成するために役立てているのです。もとよりこの精神的関心が満足させられる

14) ある文明国民について語る時、その国民が停滞的であると言うならば、いつからそのような状態に陥ったかを言わなければ、なにも言わないのとおなじことになります。(原注)

15) ジブラルタル海峡をはさむ二大岩のこと。(訳注)

ことはありますまい。それは本質的に無限なものだからです。また、それだからこそ、キリスト教民族はたえず前進を続けなければならないのです。このように、彼らの目差す目的が、非キリスト教民族の目差す物質的満足とはなんらの共通点を持たぬにもかかわらず、彼らはその前進の途上で、これを見出し利用します。他の非キリスト教民族がひたすら求めている、生きる喜びというものも、彼らは救世主の「まず神の国と神の義とを求めよ、しからば凡てこれらのものは汝に加えられるべし」<sup>16)</sup> というみ言葉にしたがって、みずからのものにしていくのです。このように、キリスト教民族を支配している精神が生み出したあらゆる知力の驚くべき展開は、精神的満足と同様に、物質的満足をも彼らに与えているのです。将来われわれの間に、中国的停滞やギリシャ的頹廢が生まれるかも知れないと考えることはできませんまい。そして、われわれの文明の全面的崩壊ということになると、これはもっと想像することもできないところです。このことを確信するためには、自分の周囲を見まわすだけで十分でしょう。現在の文明が崩壊するためには、全世界がひっくりかえるか、それとも今日の文明に現在の形を与えたのとおなじような第二の大変革が起らねばなりませんまい。全世界的な大変動が起らないとすれば、われわれの文明の全面的な崩壊というものは、想像することもできないところです。たとえば、かりに両半球の一方が完全に陥没したとしても、人間精神を復活させるためには、もう一方の半球に残ったわれわれの文明だけで十分でありましょう。いや、人間の魂の中にこの思想を確立した神の格別な意志が、天上よりこれを滅ぼすことがないかぎり、全世界を支配すべきこの思想が、停滞したり亡びたりすることは決してありませんまい。もし私が間違っていなければ、以上の深い歴史的考察から生まれたこの哲学上の結論は、月並な歴史学が、土地や気候や人種などに、特にまたその**必然的完全性**という理論に依拠しつつ、彼ら一流のやり方で、過去何世紀もの姿から引き出したあらゆるものよりも、より確実で、より明白で、より有益なものなのです。

しかしながら、キリスト教が社会や人間精神の発展や近代文明の上に及ぼした影響が、未だ決して十分に評価されていない責任の大半は、プロテスタントに帰せらるべきであると言わねばなりません。あなたも御存知のように、彼らは宗教改革に先立つ十五世紀間の教皇制しか見ていないか、さもなくば、せいぜい彼らのいう原始キリスト教が亡びて以来の教皇制しか見ていないのです。したがって彼らは、中世を通じてのカトリック教の歩みを追うことには、興味を持っていません。彼らにとって、中世とは歴史の中の空白にすぎないのです。そのような彼らが、どうして近代民族の教育というものを理解し得るでしょうか。プロテスタントの偏見ほど、近代史の歴史像を歪めるのに役立つものはありません。卒直に言って、実際には決して存在しなかった文芸復興の重要性を、あれほど好んで誇張したのもプロテスタントでした。というのも、文芸は決して完全に亡びていたわけではなかったからです。さらにまた、プロテスタントは、進歩の原因をあれこれと考え出しましたが、これらの原因はいずれも、結局のところ、きわめて副次的にしか作用しなかったか、あるいは、もっぱらより主要なる

16) マタイ伝 VI, 33 (原注)

## 哲学書簡

原因にもとづくものだったのです。しかし、さいわいなことに、最近になって、プロテスタンティズムほど不公平でなく、より高い見地をもった一つの哲学が、過去をふりかえって見ることによって、この興味ある時代に関するわれわれの考えを正すべく現われてまいりました。この哲学のおかげで、きわめて多くのことがらが、突如としてその新しい姿を見せるようになり、この上なく執拗な悪意といえども、この哲学の光の前には抗することができなくなったのです。しかして人間が、この哲学の示した道をたどるといことが、もし神の計画の中に入っているとすれば、近代社会の歴史の上を未だ部分的に覆っている闇が、偉大な光に照らし出される日も、それほど遠いことではないといつてよいかと思ひます。<sup>15)</sup>

われわれは、このようにキリスト教が二世紀か、せいぜい三世紀から存在しなくなったと考へている、プロテスタンティズムの頑迷さに、もう一度立ち戻つてみる必要がありましょ。もし彼らのいうところを信ずるならば、キリスト教が完全に亡びなかつたためには、この時以後、まさに必要なものだけが残つたことになり、十一世紀も十二世紀も間の迷信や無智も、彼らにはこのような必要なもののように思われることになつて、結局のところ異教徒におけるよりもっと嘆かわしい盲目的崇拜を、人びとがおこなつていたことになつてしまいます。さらに彼らのいうところを信ずるならば、もしヴアルド派が<sup>16)</sup>現われなかつたならば、聖なる伝統のきずなは完全に断ち切れたことであろうし、またもしルッターが現われなかつたならば、キリスト教は存在しなくなったといふことになつてしまいます。彼らがキリスト教について考へ出した、このように力も永続性も生命もない教義の中に、いつたいどうして神の御跡を認めることができましょか。この一時的でいつわりの多い教へは、人類を再生したり、それに新しい生命を満たすかわりに、ただ消え去らんがために、ほんの束の間この地上に現われたものであり、すみやかに亡びるか、それとも人間の情念の道具として用いられんがためにのみ、生まれ出たものなのです。はたして(カトリック)教会の運命は、あのサン・ピエトロ寺院を完成したいといふレオ十世の欲望にのみ、左右されるものだったでしょか。また、もし彼がこの目的から、ドイツで免罪符を売らせたりしなかつたならば、今日まで、キリスト教の足跡はほとんど何一つ残らなかつたといふのでしょか。このような、啓示宗教に対する偏狭にして卑俗な見方ほど、宗教改革の大きな欠陥を浮彫にして見せるものはありません。これは、イエス・キリストの御言葉と、その宗教の全思想に反するものではないでしょか。もしイエスの御言葉が、天地よりも長く残るものであり、イエス御自身つねにわれわれの間にあるとするならば、それではどうしてその御手もて作られた殿堂が、崩壊に遭遇するようないふことがあり得たのでしょか。この殿堂が、あたかも崩れ落ちんとする廢屋のように、かくも長きにわたつてうつろなまま残るようないふことが、どうしてあり得たのでしょか。

しかし、彼らが首尾一貫していたといふ点は認めねばなりません。彼らがまず初め

15) この文章が書かれて以後、ギゾー氏は、われわれの希望のかなりの部分を満たしてくれました。(原注)

16) 12世紀に起つた Pierre Valdo の一派。ルキウス三世によつて異端として破門された。(訳注)

に全ヨーロッパに火をつけ、ついでキリスト教民族を一つの家族として結びつけている絆を断ち切ったのも、それはキリスト教が滅亡に瀕していたからでした。事実、キリスト教を救うためには、あらゆるものを犠牲にする必要があったのではないのでしょうか。しかし、それは次のようなわけなのです。即ち、われわれの宗教が神の宗教であるということは、なによりもそれがたえず人間精神に働きかけているということによって示されるのですが、この働きかけは、時代・時代によって形を変えたり、民族や時代の要求に応じて変化することはあっても、決して鈍ったりすることはなく、ましてや、完全に停止したりすることはないものなのです。しかして、われわれの罪ぶかい本性や、いまわしき異教の伝統は、この働きかけに対して、次から次へと障害を作り出すものなのです。しかしそれらの障害をのりこえて行く力強い姿ほど、理性を満足させてくれるものはありません。

それでは、カトリック教会が原始教会から墮落したものだという主張は、いかなることを意味するのでしょうか。はたして、三世紀以来、神父たちはキリスト教徒の墮落を嘆かなかったのでしょうか。しかしてこれと同じ嘆きが、いつの時代にも、どの宗教会議においても、繰り返されなかったのでしょうか。真の信仰心は、聖職者の誤謬や悪徳に対して、さらにまた必要とあらば、教会権力の不当な介入に対して、反対の声をあげなかったのでしょうか。ところで、この世界を覆っている暗い闇の中から、時としてさし出でる輝やかしき光ほど素晴らしいものはありません。しかしてこれは、ある時は高き徳の範例であり、またある時は、民族と個人の上に及ぶ信仰心のおどろくべき影響力であります。そして教会は、すべてこれらのものを取り入れて、それを自分の力とも富ともしてきたのです。このようにして教会は、自分にとって不可欠な力を獲得するのに、もっともよいやり方で、その永遠の殿堂を打ち建てたのでした。もとよりキリスト教の初期の純粋性というものが、いつも保たれたわけではありませんでした。それはあらゆる腐敗を経過し、自由な人間理性がしるしたすべての跡を刻みこまれねばならなかったからです。そればかりではありません。使徒たちの作られたこの教会の完全性というものは、多数の異教徒たちに取り囲まれたごく小さな共同体であったという事実によっても、制限されるものでした。したがって、それは人類の普遍的な社会の共同体とはなり得なかったわけですから。周知のように、教会の黄金時代とは、そのもっとも苦難に富む時代であり、救世主の血が未だ流れている中に、新しい社会を築かんとする陣痛の苦しみの時代でありました。しかして初期のキリスト教徒を苦しめたところの、あのひどい悲惨な事態をひき起した事態に戻ろうと夢みることは、愚かなことだといわねばなりません。

ところであなたは、キリスト教を再び見出したと自負している、この宗教改革がいたい何をなしたのか、お知りになりたいのでしょうか。しかし、これは歴史の提出しうるもっとも重要な疑問の一つなのです。宗教改革がなしたことは、この世界を異教徒的分裂の状態に陥れるとともに、救世主が亡ぼさんとされた、かの精神上的個人主義と靈魂と精神の孤立化とを、復活させることだったのです。たとえ宗教改革が、人間精神の発展を促進させたとしても、それはもう一方において、(人間という)知的存在の意識から普遍性という崇高にして実り多き思想をも奪ったのでした！キリスト教世界における教

## 哲学書簡

会分離の本質は、この神秘的な統一性を断ち切ったということであり、しかしてこの統一性の中にこそ、キリスト教のあらゆる神聖な思想と力とがあるのです。カトリック教会が、離れ去った宗派と決して折合うことのできない理由も、ここにあるのです。もしもこのような分離が、正統的な権威によって認められるとしたら、それこそ教会にとってもキリスト教にとっても、不幸この上ないことです。もしそのようなことになったなら人間の思想はただちに混乱をきたし、あらゆるものが、いつわりと破滅にすぎなくなることでしょう。精神がこの地上を支配しつづけるためには、真理は目に見ることのできる、いわば触知できる確固としたものでなければなりません。しかして思想の支配が確固として永続的なものとなるのは、人間の本性に固有の形式の中においてだけです。もし人がこの目に見える結合をのぞまず、外的な実在性を欠如した、内的な意見の一致に満足するならば、キリスト教的理性のおどろくべき発見物たるコミュニオンの秘蹟は、いったいどういうことになるのでしょうか。これこそ、こうやってよければ、靈魂と靈魂とをよりしっかりと結びつけるために、それに形を与えるものだからです。もし人びとが、お互いに離ればなれになっているとしたら、救世主と結ばれたとて、それがいったい何になるのでしょうか。あのセルヴェトウス<sup>17)</sup>を殺したカルヴァンや、剣客ツヴィングリ、さらにヘンリー八世や偽善者のクランマー<sup>18)</sup>などが、この偉大な秘蹟の含んでいる愛と結合の力を認めなかったとしても、何ら驚くには値しません。しかし、ルッター派の場合になると、その聖餐の歪曲は決して教義によるものではなく、その上この派の創始者はこのような歪曲化に対してあれ程熱心にたたかったのに、どうしてこの真に宗教的で深い思想を持った宗派の人びとが、秘蹟の精神についてこれ程奇妙な誤解をなし、カルヴィニズムの死せる思想に身を委ねていられるのか、理解に苦しむところです。プロテスタントの教会には、破壊に対する奇妙な好みがあることを認めないわけにはゆきません。それらはまるで、自分自身を亡ぼすことしか望んでおらず、みずからを永続させる何ものをも欲していないかのようです。はたしてそのようなところに、地上に生命をもたらし、死を克服せんがためにおいでになられた方の教えがあるのでしょうか。はたしてわれわれは、すでに天国にあって、現在の秩序の諸条件を、何ら罰せられることなしに投げずてることができるのでしょうか。しかし、この秩序というのは、知的存在の純粹な思考と、それが存在するために不可欠なものとの結合にほかならないのではないのでしょうか。ところで、この不可欠なもの第一は、社会であり、精神と精神のふれ合いであり、思想の感情との融合であります。しかしてこれらのものを満足させることによってのみ、真理は生きたものとなって、思弁の領域から現実の領域に入ってくるのです。そしてまたこの時にのみ、思想は事実となり、ついにはある自然力の性質を獲得し、その働きは他のあらゆる自然力とおなじように、確実なものとなるのです。

17) スペインの医学者神学者 Miguel Serveto のこと。三位一体、キリストの先在、預定説を否定し、幼児の洗礼を非難したため、ジュネーブにおいてカルヴァンに捕えられ、異端として焚刑に処せられた。(1511頃—1553) (訳注)

18) Thomas Cranmer (1489—1556) ヘンリー八世とカサリンとの離婚問題に関し、王に有利な発言をして殊遇を受けた。(訳注)

しかし、どうしてこれらすべてのことが、希望と想像の中にしか存在しない観念の社会において実現し得るでしょうか。プロテスタントの目に見ることのできない教会というのは、以上の如きものであり、それが不可視であるということは、存在しないのとおなじことなのです。

離教を企てた教会が、母なる教会と離れ、「聖なる父よ、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。これわれらの如く、彼れらの一つとならんためなり。」<sup>19)</sup>という救世主の祈りを拒否したことを、悲しみと謙虚の中に心から後悔する気になった時にこそ、すべてのキリスト教の宗派が再び合同する日となることでありましょ。う。

教皇権というものが、たとえ人為的なものであり、この制度の諸関係が人間の手によって作られたものであるにせよ、それは基本的にはキリスト教の精神に由来するものです。しかしてそれは、目に見ることのできる統一のしるしであって、過去において分割していたということは、それが再び合体するしるしでもあるというわけです。このような理由があるからには、教皇権に対し、他のすべてのキリスト教宗派に対する優越性を認めて、いったいどこが悪いのでしょうか。この教皇権の奇しき運命に対し、驚嘆しないものがあるましょ。うか。いかに変遷を経、厄災をこうむり、それ自身誤りもおかし、不信仰に攻められたり、それを克服したりしよ。うと、教皇権はかつてなかったほど確固として存在しています。人為的なはなやかさを脱した教皇権は、それによって一層強化されるとともに、無視されればされるほど堅固になり、永続性を保証されているのです。かつては、キリスト教世界の尊敬が教皇権を維持してきましたし、諸民族のある本能は、この中に現世及び来世の救いの源泉を見てきました。しかし今やこの教皇権を維持しているものは、地上の諸権力のただ中にあるその謙虚な態度なのです。しかしてそれは、常にみずからの使命を完全に達してもいます。教皇権は、キリスト教思想の中心となり、これらの思想を互いに近づけるとともに、誤って統一性を否定した人びとをまで信仰の至高の原理に立ち戻らせているのです。それは、またみずからに刻みつけられている神よりの使命によって、常にこの物質的利害の世界を、おごそかに見おろしてもいます。現在のところ、いかに人びとが教皇権に意を用いることが少かろうと、万一それがこの地上から突然姿を消すようなことになって、この歴史の生ける記念碑たる偉大な共同体がもはや存在しなくなるような時が立ち到れば、他のすべての宗派は道に迷い込んで、どうしてよいかわからなくなってしまふことでしょう。人びとは、今日かくも軽視しているこの目に見える統一性を、至るところにさがし求めることでしょうが、どこにも見出すことはできません。目下のところ、キリスト教的理性は、みずからの未来に対する貴い意識で満たされ、他の理性とは異なる、より崇高な生命を与えられています。このような貴重な意識も、教皇権が存在しなくなれば、かつて活潑に存在していたものの思い出だけにもとづく希望と同様に、必然的に消え去ってしまうことでしょう。このような希望は、その活潑に存在していたものが何らの成果をも生み出さないものであることがわかるや、ただちに消失してしまうものであり、またわれわれの過去の

19) ヨハネ伝 XVII, 11。(原注)

## 哲学書簡

記憶そのものも、過去がむなしなものとなるや、すみやかに失われてしまうものだからです。

## 《第七書簡》

奥様

さきごろ私があなたに申しあげたことにつきまして、よくお考え下さいますならば、すでにこれらのことが、いろいろな意見や党派の人たちによって何度も述べられたところであり、私たちはただ、彼らが未だ特に興味を持たなかったことがらについて、関心を喚起しただけであることがおわかりになられたことと思います。しかしながら、もしもこれらの書簡がたまたま目の見ることになったら、人びとが逆説だといって非難するようになることも疑い得ません。世の人びとは、きわめて一般的な考えをある程度の確信をもって主張するのに対し、常になにか新奇なことのように見なすものだからです。私といたしましては、現実的な根拠のない理論や逆説の時代はすでに遠い過去のものとなり、人びとがこの一時代前の悪癖に陥ることは、今や愚かなことであると考えております。今日、人間の理性が、あの啓示と発明の偉大な時代ほど広大でも崇高でも豊かでもないことはたしかですが、それでも理性は、かつてなかったほどきびしく、節度あり、整然として厳密なものであることに違いありません。しかしてこの人間理性が、暫く前から、これまたかつてなかったほど普遍的になったということは、真に喜ぶべきことのように思われます。なぜならこの普遍性こそ、個人個人の意見の無分別さに対する、もっともたしかな保証だからです。

もしわれわれが、人類の思い出について深く思いをこらすことによって、偏見を脱して、われわれ自身の見解に到達したとするならば、前世紀において自然科学に対してなしたのと同様な卒直さをもって、歴史に対処すべき時だと思われれます。即ち、その全経験的現実性において自然科学を認めたように、歴史をば、その全合理的観念性において理解すべき時だと思ふのです。歴史の主題と歴史を認識する手段とは常におなじものですから、歴史的経験の環がいつの日にか閉じられるにちがいないことは明らかです。しかしてその応用が尽きることは決してないでしょうが、ひとたび歴史の法則が発見されたならば、もはやそれに付け加えるべきものは何もありません。自然科学においては、新しい発見がなされるたびに、精神に対して新しい分野が開かれ、新しい観察の場が開けます。このことは、たとえば顕微鏡によって、古代の自然科学者がまったく知らなかった一つの世界をわれわれが認識し得たということからも明らかです。したがって自然科学の研究においては、進歩は必然的に無限なものです。しかし歴史においては、人びとが研究するのはつねに人間であって、この分野の研究においてわれわれに役立つ

ものは、つねにおなじ手段なのです。ですから、もし歴史の中に何か偉大な教訓が秘められているとするならば、人びとはいつの日にかあらゆる経験を決定的に仕上げるような何か確固としたもの、即ち、完全に合理的な何ものかまで到達しなければなりません。かって私があなたに申しあげた、「人間があとからあとから続いて来るといふことは、一人の人間が永遠に生き続けること」<sup>1)</sup>であるという、あのパスカルのすばらしい思想も、やがては抽象的な原理を比喩的に述べたものではなくって、この時以後、いわば全時代にわたる人類の思想の巨大な鎖を揺り動かしつつ、一步・一步前進しなければならぬ人間理性の、真の現実となることでありましょう。

しかし、はたして人間は、今日自分の中に見出している個人的にして孤立した意識の代りに、みずからを偉大な精神的全体の一部と感じさせるような、この普通的意識を自己に与えることができるでしょうか。然り、たしかにできます。そのためには、次のように考えてごらんください。われわれは、自分自身の個人的感情以外に、みずからがその一員である祖国とか家庭とか思想上の仲間とかいったものとの結びつきの感情をも心の中に持っています。そしてこの感情は、しばしば個人的感情よりも強いものです。たしかに、われわれの中には至高の意識の萌芽が存在していて、それはわれわれの性質の本質を形づくっています。またわれわれの真の自我は、決してある必然的な法則によってあらかじめ与えられたものではなく、われわれ自身が魂の中に入れたものなのです。人びとは、その個人的な存在を無にして、それを完全に社会的もしくは非個人的な存在に代えること以外、いかなる使命をもこの世に持たぬということを理解するでありましょう。しかしてこれが道徳哲学の唯一の基礎であることは、すでに見てまいりました。<sup>2)</sup>さらに歴史的思惟もまたこれ基盤とするものであって、人類の歴史のさまざまな時期を歪曲し曇らせている誤解というものも、冷やかな学問的興味からではなく、道徳的真理の深い感情をもって考察すべきであることがおわかりになられましょう。ところで人は、いかにしてかって存在しなかったのと同化することができるでしょうか。どのようにして、実在せぬものと自分とを結びつけることができるのでしょうか。この実在せるものと実在せぬものとの双方の引力が生ずるのは、真理の中においてだけなのです。しかしてこの高さにまで到達するためには、われわれは歴史研究において、想像上の空想や記憶にたよる習慣をきっぱりと棄てて、今まで人びとが絵のように美しいものや、面白いものをつねに求めてきたのとおなじ熱心さをもって、確かではっきりとしたものを追求しなければなりません。われわれのなすべきことは、みずからの記憶をもろもろの事実で埋めつくすことではありません。そうしたとして、それがいったい何になりましょうか。事実の集積が、必然的に確実性をもたらすと考えることは誤りです。一般的に言って、歴史的な理解を疑わしいものにしてしているのは事実の不足からではなく、また、歴史的無知も事実を知らないことに由来するものではありません。このようなことが起るのは、熟慮し、反省することが足りないからであり、判断が不足しているからなのです。学問のこ

1) 第五書簡。「スラヴ研究」No.8、P.123 参照。(訳注)

2) 他の書簡を参照のこと。(原注)

の分野において、もし人が事実のみによって確実性にまで到達したり、明確な知識を持ちたいとのぞんでも、そのために十分な事実は決してないということは、誰にでもわかることです。はっきりとつかまえられた、たった一つの特徴が、しばしば全年代記よりも時代を明瞭に浮かび上らせることがあります。したがって、われわれの則るべき規則は、次の如きものとなります。即ち、われわれの知っている諸事実を深く考えること、しかして死せる史料よりも生けるイメージを精神の中に持つべく努力すること、以上です。もし他の人びとが、歴史の古い埃をあれこれと穿鑿したいなら、勝手にさせておけばよいのであって、われわれにはなすべきことが別にあります。われわれは以上のように、歴史的史料は常に十分であると考えています。むしろ、たえず用心しなければならないのは歴史の論理です。われわれは、つねに知性を働かせてこの論理を吟味せねばなりません。もしわれわれが、他の人びととおなじように歴史の流れの中に理性と完全と自由な意志だけしか見ないならば、いかに知識の中に事実を積み重ね、いかに巧みにある事実から他の事実を導き出そうと、何ひとつ歴史の中に求めているものを見出すことはできません。このようなやり方では、すでに人びとがあらゆる時代に見てきたのとおなじ人間的たわむれしか見出せないことでしょう。<sup>3)</sup>このような考え方は、あらゆるものを、個人や、想像上の因果関係や、人間の空想や、あるいはこの空想から不可避的に出てくる仮定的な原因によって説明しようとする、先ほど申し上げたような、あの力学的・心理学的歴史を常に生み出すこととなります。そして、このような歴史は、至高の法則の働きが歴史の法則の作用よりもその本質的優越性からして必然的に明らかなものであることも理解せずに、人間の知性をそれ自体の法則に委ねてしまうものなのです。<sup>4)</sup>

3) 人はヘロドトスや、チトゥス・リヴィウスや、トゥールのグレゴリウスが、あらゆる人間的事件の中に神を介入させなかったとあって、彼らを非難することはできません。だからといって、われわれも、神が毎日のように人事に介入するという迷信的な考えにまで、人間精神を引き戻そうと考えているのでないことは言うまでもありません。(原注)

4) ローマについては多くの人が語り、そこを訪れていますが、ローマを理解している人はごくわずかです。ところでこのローマには、驚くべき一つの記念碑が残っています。これは、現代迄残っている古代の一事業であり、時代の流れにも押し流されることのなかった古い時代の一事蹟であると言えます。それはコロッセウムです。歴史上、この廃虚の光景ほどふかい物思いをかりたてるものはないように思われます。私の考えでは、これは人類の二つの時代の特徴をきわだてて示すと同時に、キリスト教が出現する以前の社会においては、真の進歩も真の永続性も決してなかったという歴史の偉大な自明の理をきわめて明瞭に示すものです。事実、ローマの民衆はここにおいて殺戮をほしいままにし、異教徒の群は恐るべき慰めにふけり、この時代の全生活がその華麗にして目もくらむばかり享楽をくりひろげたのでした。われわれの前に立っているこの光景は、実に人間の中にあるもろもろの力が社会の建設に用いられたあとで古代世界の崩壊が至るところから宣告され、バルバールの新しい時代が始まんとする時に、一体いかなる地点まで古代社会が到達したかを告げるものではないでしょうか。そして新しい社会という建物の基礎を洗うべき血が初めて血煙を立てたのも、この場所においてでありました。しかればこの記念碑は、それ一つで万巻の書物に価するものではないでしょうか。にもかかわらず、人びとがこの記念碑の中に含まれている偉大な真理に満ちた歴史思想から、未だかつて一度も啓示されたことがないということは、奇妙至極と言わねばなりません。ローマには数知れぬほど多くの旅行者がやって来ましたが、その中に一人の人物が居りました。彼は近くの名高い岡の上からこの驚くべきコロッセウムの光景を心ゆくまで眺め、一彼自身の言葉によれば一何世紀もの時代が自分の前に展開するのをその目で見て、時代の流れの謎を解いた気になったものでした……しかしどうでしょう！彼が見たものは凱旋する兵たちと、修道士だけだったのです。つまり、凱旋の行進と宗教的な行列以外何もこの地を通過したものはなかったとでも言うのでしょうか。しかし誰も知っている、あの偽鬱に満ちた著作は、このような貧しく偏狭な見解の所産なのです。これこそ、かつて存在したもっともすぐれた歴史家の一の屈辱的行為であると言わねばなりません。(原注)

以上申しましたことが根拠のないものではないという証拠に、奥様、歴史の卑俗的な解釈の誤りのもっともいちじるしい例をあげてみましょう。あなたは、ギリシャ人によって芸術が人間のもっとも偉大な思想の一つにまで高められたことは御存知と思います。ところで、彼らの天才が創り出したこの素晴らしい創造物は、いったい如何なるものから成るのでしょうか。人間の中にある物質的なものは、すべて理想化され、誇張され神格化されましたが、自然な正しい秩序は顛倒されてしまったのでした。そして本来は知的世界の低い所に場所を占めるべきものが、人間のもっとも高い思想の水準にまで高められ、精神に対する感覚の働きかけは無限に拡大されるとともに、理性の中において、人間的なものと神に関するものとを分っていた偉大な境界線は取り払われてしまったのでした。ここから道徳の全分野にわたる混乱が生じたのです。知性は知るに価せぬものに対して、それを知ることがもっとも重要なものに対してとおなじ熱心さをもって注意を払ったのでした。つまり、思想の全領域がおなじように興味あるものとなったのです。想像力の中には、理性と真理の素朴な詩に代って感覚的で偽りの多い詩が入りこみ、われわれをして定かな形とてなきものを想像させ目に見えぬものを見せしめるために作られたこの強力な能力は、この時以降、もっぱら触知できるものをより一層感覚的にし、現世的なものをより一層世俗的なものとするために用いられたのでした。即ちわれわれの精神的存在が小さくなればなるほど、肉体的存在は大きくなっていったのです。なるほどピタゴラスやプラトンといった賢人たちは、彼らの時代のこのような有害な精神的傾向に対してたたかいましたけれど、彼ら自身もこのような傾向に多少なりとも感化されて、その努力もむなしいものとなってしまったのでした。そして、彼らの説が本当に影響力を持つようになったのは、ようやくキリスト教の精神が人びとの気持を一新させた後のことだったのでした。このように、ギリシャの芸術がなしとげたことは、物質的な事物の礼讃だったわけで、このことは否定できないところです。しかしこのことがこのように理解されているかと言えば、決してそうではありません。人びとは今日まで残っている記念碑が、いったい何を意味するのかも理解せずに見つめています。そして、さいわいにも、もはやこの地上には存在しなくなった天才たちのこれら靈感にあふれた素晴らしい作品を見ては喜んでいますが、その際に自分の心の中に生じた不純な気持や偽られる思いについては疑ってすらいないのです。これこそ道徳的感情がすっぽりと落ち込んでいるある種の盲目的崇拜であり、酔い心地であり、幻惑であると言わねばなりません。しかし、これらのものを生み出すものが、われわれの存在のもっとも卑しい部分であり、またわれわれがこれらの大理石やブロンズの裸像をば、いわばわれわれの肉体で理解しているのだということを知るためにはどのような気持でかかる愚かな恍惚感にひたっているのかを冷静な感情で理解すればそれで十分でしょう。しかしこれら像の持つ美とか完全性とかいったものが、もっぱらそれらが表現しているじつにくだらないものから来ているということに注意して下さい。もしほんのかすかでもこれらの像の顔だちの中に理性のしるしが現われたなら、われわれを魅了している美の極致は瞬時にして消え失せてしまうことでありましょう。したがって、われわれが見つめているのは決して理性的存在の姿などでは決してなく、この上なく錯乱した精神の横溢が生み出

した一種の怪物であり、人間の形をした架空の動物なのです。そしてその姿かたちは、われわれを喜びで満たすどころか、むしろ嫌悪感をもよおさせるものなのです。以上のように、卑俗な歴史観を生んでいる偏見だとか、学派の慣習だとか、型にはまった精神だとか、人を欺く幻影の魅力とかいったものは、歴史哲学のもっとも重要なところを歪めたり、曇らせてしまっているのです。

はたして私自身がこれらの芸術の魅力に対して、常に無関心であったかどうか、あなたはおたずねになるかも知れません。いいえ、奥様、まさにその反対だったのです。私はこの芸術の持つ魅力を、ある理解できぬ本能によって、私の生活を満たすにちがいない快いよろこびとして、それを知る以前においてすら、予感していたのでした。今世紀におけるもっとも偉大な出来事の一つ<sup>5)</sup>が私をしてかの都会<sup>6)</sup>へと導いたとき——そしてこの都会には、征服によってきわめて短時日の間にじつに多くのすばらしい逸品が集められていたのですが——私もまた他の人びととおなじように、いやよりいっそう献身的に、これらの偶像の祭壇で香を焚き、称讃を惜しまなかったものでした。ついで二回目、それらを本国の太陽の光の下で見たときにも、私はまたしても深いよろこびに満たされたことでした。しかし、このよろこびの底には、いつもなにか悔恨にも似たにがい気持が秘められていたということもたしかです。したがって、真理を理解したときに、私がおの真理から生まれたいかなる結論をも回避することなく、そのすべてをただちに受け入れたということも事実でした。

しかし奥様、今や話を先日申しあげた歴史上の偉大な人物へともどしまししょう。私の見ますところでは、歴史はこれらの人物に対し、人類の思い出の中で彼らにふさわしい地位を与えてはおりません。したがってあなた方はこの問題について不完全な考えしかお持ちではないというわけです。そこで、あらゆる歴史上の人物の中でもっとも巨大で威厳のあるモーゼから話を始めるとにいたしまししょう。

古代の民族のあらゆる歴史の最初の幾頁かには、いろいろな英雄や神の如き人物や予言者たちが出てきますが、ユダヤの偉大な立法者たるモーゼもまた、ふかく思索すると自負する人びとによってさえも、このような奇妙な世界に属する詩的な人物として考えられてきました。しかして歴史的思惟は、かかる人物の中になにか教訓的なものを、即ち人類の伝説が彼をして関係せしめたその時代の典型とか象徴とかの表現のみを見出すことをめざしてきたのでした。しかし幸いにして、このような時代はもはや過去のものとなりました。今日ではモーゼの歴史的事実性を疑うものは誰一人おりません。しかしそれにもかかわらず、モーゼの名前にまつわる神聖な雰囲気といったものは、決して彼にとって好ましいものではありません。それは彼がみずからにふさわしい位置を占めることを妨げているからです。この偉大な人物が人類に及ぼした影響は、理解されもせず、しかるべき評価も受けてはおりません。そして彼の相貌は、それを覆っている神秘的な光の中であまりにもかすんでしまっています。モーゼに関する研究が十分になされていないために、彼は歴史上の偉大な人物を研究することによってもたらされる教訓という

5) 祖国戦争をさす。(訳注)

6) パリを意味す。(訳注)

ものを、なに一つ与えてはおりません。大衆も個人も、思索する人も行動する人も、だれ一人として彼の生涯の物語の中に含まれている教えを見出してはいないのです。これは宗教によって人間精神の中に取り入れられた習慣の結果であって、このような習慣というものは、聖書中の人物に超人的な様相を与えることによって、実際の姿とは全く似ても似つかぬものに仕立てているのです。<sup>7)</sup> モーゼの姿の中には、気高さと素朴さ、力強さと温厚さ、そしてとくに、荒々しさとやさしさが奇妙にまざっています。しかし、私の見るところ、どうも人びとはこの点について十分に思いをこらしてはいないようです。私は、歴史上これほど相反した特徴や力を兼ねそなえている人物は一人もいないと思っています。この驚くべき存在について、また彼が人びとの上に及ぼした影響力について考えるとき、私は自分が、彼のひき起した歴史的事実に対してもっと感嘆すべきなのか、それとも彼の人物の中に見出される精神的事実に対してより驚くべきなかわからなくなってしまう。一方では、この地上において唯一の神の思想を保持するという使命を託された選ばれた民族についての偉大なる観念と、彼がこの思想をみずからの民族に植え付けた、かつて聞いたこともないような素晴らしいやり方が見られます。彼はその民族にこの思想をば完全無欠な形で与えただけでなく、それがやがては自然の力とおなじように強力にして抗し難い力となって現われ、その出現の前ではすべての人間的な力が消え失せ、あらゆる賢明な人びとがこの力に従うにちがいないといった形でしっかりと植えつけたのでした。ところが他方では、弱々しいまでに純朴で、みずからの無力さに対してしか怒りをあらわすことなく、力の限りを尽して説得することによってしか命令をくだすことのできぬ、そして誰にでも教えを乞うといった、もっとも強力であると同時にもっともおとなしい、なんとも奇妙な物質が見られるのです。彼は未来を創造するとともに、みずからの前に真理の形をとって現れるものに対してはつつましく従います。稲妻の煌めきの中に人びとに語りかける彼の声は何世紀にもわたって響き、運命の如く人びとの胸を打ちます。しかし同時に彼は、感じやすい心の動きや自分に示された正しい理由に対しては、すぐにでも譲歩するのです。これこそ驚くべき偉大さでありかけがえのない教訓ではないでしょうか。

しかし人びとは、彼がその民族の解放において示した見事なヒロイズムを賞賛しながらも、彼も初めのうちはみずからの民族をその耐えがたい軛から自由にしてやることしか考えていなかったのだといって、その偉大さを高く評価しようとはしませんでした。かつて彼の中に偉大な立法者しか見ようとしなかった人びとは、現在では彼の法が驚くほどリベラルなものであると考えているように見えます。更にまた彼らは、彼の神

7) しかし実際には、聖書中の人物はわれわれにとって、もっとよく知られてしかるべきものであることに留意せねばなりません。なぜならば、彼ら以上にその特徴がよく描かれている人びとはいないので。聖書の力強い影響力の一つは、このことにあります。人びとは、これら聖書中の人物をわが身のこととしてはっきり感じるができるので、これらの人物は人びとの意識の上にもっとも密接した形で直接に働きかけることができるからです。またこのようにしてこそ、人びとの魂がキリストの御姿によって深い感化を受ける準備がなされるわけです。聖書の中にはこれらの人物の特徴がじつによく描かれているので、彼らのイメージは人びとの精神の中に深く刻まれ、あたかもわれわれがこれらの人物たちと親しく生活してきたかの如き印象を与えています。(原注)

が一民族の神であったにすぎず、彼はその神知学をエジプト人から学んだのだとも言っています。なるほど、彼が愛国者であったということはたしかでしょう。しかし、この世になんらかの使命を持っているもので愛国的でないものがはたしているのでしょうか。それに人びとに影響を与えるためには、自分が属している場の枠内で、自分自身の生まれた社会的集団の上に働きかけなければなりませんし、人類全体に向ってはっきりと語りかけるためには、まずみずからの民族に対して語らねばならないというのが一般的な法則なのです。もしそうでなかったなら、人びとは耳を傾けてもくれないでしょうし、なんらなすところなしに終ることでしょう。人が同胞におよぼす精神的影響というものは、それが直接的で実践的であればあるほど確実に強いものになります。同様に、言葉というものは、それが個人的なものであればあるほど力強いものになるのです。この偉大な人物を動かした至高の原理がいったい何であったかを知るためには、彼が目差したことがらを実行するに当って用いた手段の正しさと、その完全な効果にしくものはありません。彼がみずからの民族ないし他の民族の中に、民族的な神の観念を発見し、それをば彼が以前に見出した他の多くの事実とおなじように、人間の思想の中にその崇高なる一神論を導入するために用いたということは、ありうることも知れません。しかしこのことから、キリスト教徒にとってそうであるように、彼にとってエホバが全世界的な神でなかったということにはならないのです。彼がこの偉大な教義をみずからの民族の中に秘めておこうとすればするほど、またその目的のために非凡なる手段にたよればたよるほど、すべての人のために、未来の全世代のために唯一の神の観念を保持するというきわめて普遍的な思想が、この至高の理性の働きを通して表面に浮かび上がってくるのです。当時全世界に広がっていた多神教の中であって、真の神に神聖にして侵すべからざる神殿をうち建てるためには、偶像崇拜をおこなっているすべての民族に対する憎悪を、この神殿を守っている民族の間にかき立て、彼らのあらゆる社会生活や運命や希望といったものを、もっぱらこの原理に結びつけること以上に確実な手段がありえたでしょうか。もしもこのような見方で申命記を読みますならば、これがモーゼの法だけでなく、あらゆる啓示哲学の上にかにすばらしい光を投げかけているかを驚きとともに見出すことでしょう。

このたぐいまれなる書物の一語一語は、その著者の精神を支配している超人的な思想をよく示しています。さらにこの書からは、モーゼのやさしい性格とはまったく正反対のあの恐るべき虐殺も理解されることでしょう。信仰がないというよりは愚かであるといった方がよい哲学は、この大虐殺に対して大いに憤慨しましたが、この哲学にとって、モーゼという、神の手中のおどろくべき道具であるとともにそのあらゆる秘密に通じた人間が、神御自身、自然の理そのもののようにしか行為できなかったということは理解できなかったのです。さらにこの哲学は、モーゼにとっては時代も世代もいかなる価値も持ち得ぬものであり、彼の使命というものが正義や道徳的完成の手本というよりは、人間精神の中に、ある偉大な思想を吹き込むことにあるのだということを理解してはいませんでした。しかしてこの偉大な思想というのは、人間精神がみずからの中からは生み出すことができないところのものなのです。その愛に満ちた心からほとぼり出

る慟哭を抑えながら、大虐殺を命じ神の正義の剣を下した時に、彼がその率いている愚かにして強情な民を無事に移住させることしか考えていなかったとでもいうのでしょうか。まったくもって、結構な心理学的説明です。かかる心理学は、その考察せんとする現象の真の原因にまでさかのぼって究明しようとはせず、同一の魂の中にまったく相反する特徴を結びつけるような労苦はいたしません。それは一人の人間の中にこのような相反した特徴が結合しているということ、かつて一度も見たことがないからです。

要するに、モーゼがエジプト人の智恵の中から何らかの教訓を学びとったとしても、そんなことはどうでもよいことなのです。また、彼が最初はみずからの民族を隷属状態から解放することだけしか考えなかったとしても、そんなことは大したことではありません。それともこのようなことによって、彼が自分の魂の奥底かどこからか引き出してきた思想をこの民族の中に実体化し、それをば人間の本性の中にのみ見出されるような永続的で確固とした要素で包むことによって、人びとに真の神を与えたということ、従って、この原理に由来している人間のすべての知的発展というものが文句なく彼に負うものであるという事実が、疑わしいものになるとでもいうのでしょうか。

つぎにダヴィデは、歴史上の人物の中でもその特徴がもっともよく伝えられている一人です。彼の生涯の物語ほど、いきいきと劇的で真実なものはなく、彼の容貌ほど特徴のあるものはありません。その生涯の物語や、現在というものがあれほど見事に未来に溶け込んでいる彼の崇高な歌は、われわれに彼の心が意図していたところをじつにはっきりと描いて見せてくれていますので、われわれにとって彼の中にかくされたものは何ひとつないと申してもよいでしょう。しかしそれにもかかわらず、彼からギリシャやローマの英雄のような印象をうけているのは、きわめて宗教心に富んだ人びとだけです。またしてもこのことは、聖書中のすべて偉大な人物たちが、なにか特別な世界の人たちだという誤解にもとづいているのです。彼らの額を照らしている光が、不幸なことにも、これらすべての人物をして知性が欲さぬ所へと、かたくなに服従を命ずる執拗な力の世界へと追いやってしまっているのです。しかしこのような世界にあっては、人びとはつねに仮借なき法の下にあって、もはやかかる法則にしたがうほかは何ごともなしえないというわけなのです。しかし、時代の動きというものは、このような動きを生み出した原理がもっとも明瞭に現われるところをさしおいて、いったいどこで研究することができるのでしょうか。

ソクラテスおよびマルクス・アウレリウスと、これら二人の聖書中の人物を対比することによって、私はあなたが、彼らの偉大さというものがかくも相違するものであることを知って、彼らが出てきた二つの世界というものを正当に評価されることをのぞいたのでした。クセノフォンの中に出てくるソクラテスの逸話をお読みになってごらん下さい。それも、もしできることなら、ソクラテスの思い出にまつわる偏見を抜きにして読んでみてごらん下さい。その上で彼の死というものがいかに彼の名を高めるのに寄与したか、彼の評判倒れの守り神がいかなるものであったか、また彼が時としてどれほど悪徳に対してへつらった態度をとったか、よくお考えになってみて下さい。<sup>8)</sup> また彼の同時

8) もし私が一人の女性にあてて書いているのでなかったら、読者に対しこのことについて理解を深めるために、プラトンの饗宴を読むようにすすめたことであらう。(原注)

## 哲学書簡

代人が彼を告発した時のさまざまな非難についても、彼が自分は後世にまったく不確実な思想をのこすものであるとその死の直前に言った言葉についても、よく考えてみてください。さらにまた、彼の学派から出たじつにさまざまな、不条理で矛盾した意見についてもお考えになって下さい。マルクス・アウレリウスにつきましても同様に、彼に関する迷信をおすてになることです。そして彼の書をよく考えてお読みになり、リオンの虐殺を思い起し、彼がその世界をひきわたしたかの恐るべき人物や、彼が生きた時代や、彼が属していた上流社会がどのようなものであったかをよく考えてみてください。また彼がその立場から思いのままになした尊大なやりかたについても思い起してみてください。そしてそのあとで、ソクラテスの哲学が生んだ結果とモーゼの宗教が生んだ結果とをくらべ、さらにまたローマの皇帝の人物と、牧人から王者とも詩人とも賢者ともなった人物とをくらべてみるのです。彼こそみずからの中に予言者—立法者という偉大にして神秘的な理想を具現化し、人類の運命が実現するに相違ないその驚嘆すべき世界の中心となり、みずからの民族の全存在をも占めるすぐれて宗教的な傾向を決意し、かくすることによって、この地上に真理の王国を可能ならしめる唯一の秩序を確立した人でした。たとえ詩的な思想がわれわれにモーゼやダヴィデの如き人物を超人的な存在として描き、彼らを格別な光で包むとしても、冷静なる常識は彼らの中に単に偉大にして例外的な人物以上のものを必ずや見るであろうことを、あなたはきっと認められることでありましょう。しかしてまたこれらの人物が、精神的世界の生活の中でこの世界を支配している至高の法則の実に直接的なあらわれであり、彼らの出現というものが、時として自然を変改し更新する物質的秩序のあの偉大な時代に一致するものであるということも、あなたには明らかだと思います。<sup>9)</sup>

次にエピクロスが出てまいります。べつに私はこの人物の名声を重要視するものではありませんが、しかしまず初めに彼の唯物論なるものが、他の古代の哲学者の思想と決してちがったものではないにせよ、他の大部分のものよりも、より率直で、より首尾一貫したものであることだけは知る必要があります。エピクロスは彼らのように際限ない矛盾の中に迷い込むというようなことはありませんでした。異教徒の理神論も、彼には事実それがそうであったように愚かなものだと思われ、唯神論もまた欺瞞だと思われたのでした。さらに彼の自然哲学も、同時代の自然哲学者の研究に劣るものでは決してなく、どこかでベーコンが古代におけるただ一人の合理的な自然哲学者であると言っているあのデモクリトスの自然哲学にほかならないものだったのです。また彼の原子論について申すならば、もしこれを形而上学から離して考えるならば、原子論がかくも確かなものとなった今日から見ても、決してそれは人の言うほどばかげたものではないのです。しかし、あなたも御承知のように、彼の名は主としてその道德論に結びつけて考え

---

9) しかしながら、古代世界において、みずからの信念のために死んだ唯一の人物たるソクラテスの偉大な栄光は、きわめてなっとくのゆくところです。事実この思想上のヒロイズムの唯一の例は、古代の人びとをして有り得ないこととして、啞然たらしめたにちがいありません。しかし、多くの人びとが真理のためにみずからの生命を捧げた事実を見てきたわれわれが、彼らとおなじように誤って理解したとしたら、それは愚かしいことではないでしょうか。(原注)

られているのであり、この道徳論こそ彼の名声を傷つけているのです。しかしわれわれはこの道徳論をば、もっぱら彼の学派の度をすごしたやりかたや、彼が死んだあとで生まれた多かれ少なかれ勝手な解釈にもとずいて判断しているのです。ところで彼自身が書いたものとは言えば、もはや無くなってしまっていることはあなたも御存知の通りです。快樂という言葉を目にしただけで、身ぶるいするのはキケロの勝手ですが、かくも不評を招いたこの道徳論をもっぱらこの著者その人についてわれわれが知るところにもとずき、この人物が異教徒の世界にひきおこした結果は考慮せずにその説自体を理解すべきものとして古代の他の道徳論とくらべるならば——なぜならこのような結果というものは彼の理論そのものよりも時代時代の一般的な精神のありかたによって説明されるものですから——それがストア学派の道徳論ほど尊大でもなければ、かたくななものでもなく、実行不可能なものでもないということ、さらにまた、それがプラトンの学派の説ほど漠然と曖昧で無力なものでもないということがわかることでしょうか。このエピクロスの道徳論は、愛情に富んだ、寛大で人間的なものであって、いわばキリスト教的モラルのあるものをもその中に有しているものなのです。この哲学の中には、古代の実践哲学が完全に欠如していたある基本的な要素、即ち人間と人間との間の結びつきだとか連帯性だとか好意だとかいった要素が含まれていることを認めないわけにはゆきません。とりわけこの中には、同時代の哲学の中に見出すことのできぬ良識があって、尊大なところがまったく無いのです。さらにまたこの哲学は、天上の神々の至福にも似た地上の幸福とも言うべき魂の安らぎとか、おだやかな喜びの中に、至上の幸福を見出しているのです。そしてこのような生活の例を、エピクロスは自分自身で示しています。彼はこの上なくやさしい愛情に囲まれて研究に没頭しつつ、ほとんど目立たない人物としてすごしたのです。もしエピクロスの道徳論が、当時の人びとを支配していた古い原理によってそこなわれることなく、彼らの精神の中にしっかりと根をおろすことができたならば、彼の説が人びとの心の中に、あのストア派の思いあがった道徳論もプラトン学派の瞑想的な思索も広めることのできなかつた柔和さと人間らしさとを広めたであろうことは疑もないところです。エピクロスが古代の賢人たちの中でもその品性において非の打ちどころのない唯一の人物であり、その弟子たちによって愛情と崇拜に近いまでの尊敬の気持をもって思い出される唯一の人物であったことにも留意して下さい。<sup>10)</sup>今やあなたは、何故われわれがこの人物について自分たちの思い出を幾分か訂正するように努めなければならないのか、おわかりになったことでしょうか。

アリストテレスについてふりかえって見ることはいたしますまい。彼が近代の歴史のもっとも重要な一章と関係があることはたしかですが、対象としての彼は、付随的に扱うにはあまりに大きすぎるからです。ただここで、アリストテレスがいわば新しい精神の所産であるということだけは注意して下さい。知識欲にもえていた青春時代の新しい理性が、この知性の技師に惹きつけられたとしても、それはきわめて自然なことでした。

10) ピタゴラスも例外ではありません。この人物については、人びとはその欲するすべてを彼に帰してしまって、今や伝説上の人物となっています。(原注)

## 哲学書簡

なにしろこの技師は、ハンドルや挺子や滑車をもちいて人間の理解力を驚くべき速さで動かしたのですから。彼を最初に発掘したアラビヤ人たちが、大変彼が気に入ったのも、これまた極めてなっとくのゆくところですよ。この突如として現われた民族には、自分たちのよりどころとなるようなものは、なに一つとしてありませんでした。したがって、彼のすっきりできあがった学問は、まさにおあつらえむきのものだったわけです。しかし、今ではこういったこともすべて過去のこととなりました。アラビヤ人も、スコラ哲学者も、そして彼らに共通の師も、すべてその異った使命を果し終えたからです。これらのものは、精神に対して今までよりも多くの確実さと落ち着きとを与え、その歩みはよりしっかりとしたものになってきたのです。そして精神は、みずからの進歩を助け運動を速めるような、歩調をとるようになりました。御覧のように、新たなる理性の秘められたる光と力とによって、悪は善へと変わり、すべてはよりよくなっていったのです。今やわれわれはみずからの歩調へともどり、知性が黄金と紺青との天使の翼以外、如何なる用具をももちいることのなかったあの頃の広き道をふたたびたどらなければなりません。

次にマホメットへと話を移しましょう。彼の宗教が人類に与えた恩恵というものを考えてみますと、まず第一に、それが他のより強力な原因とともに多神教の破壊に協力したということ、ついで、この地球上の広大な地域に——全般的な知的運動が及ばない地域にすら——唯一の神という概念と普遍的な信仰の概念とを広めたということがあげられます。このようにして彼の宗教は、数知れぬほど多くの人びとに対して、人類の終局的な運命をあらかじめ覚悟させたのでした。以上のことを考えるならば、この偉大な人物がみずからの生まれた時代と場所とに当然払うべきものを払ったままでとはいえ、あれら多くの無益なる賢者とは比較にならぬくらい人類の尊敬に値する人物であるということは認めざるをえないでしょう。これらの賢者たちは、みずからの思想に生命や肉体を犠牲にすることもなく、一人の人の心をもしっかりとした信念で満たすこともせず、人間性のばらばらになった諸要素を統一しようと努力する代りに、分裂させることしかしなかったのですから。世界中の教法の中でも、イスラム教はもっとも注目すべき現象の一つであるように思われます。もし回教を別の観念から批判するならば、それはこの教えのもととなっているキリスト教の普遍的な影響というものを無視することになります。われわれの宗教のもっとも基本的な特徴は、それが宗教思想のじつにさまざまな形態をまとうことができるということと、みずからの最終的な目的に到達するためには、必要とあれば誤解も恐れずに連合することができるということにあります。啓示宗教の歴史的発展の中で、マホメット教は当然その一分派と考えらるべきものです。きわめて排他的なドグマといえども、この事実を認めることに困難はないはずです。そしてマホメット教徒がわれわれの宗教の当然の敵であるように思いこませているものが、いったい何であるかが理解されるならば、上の事実は必ずや認められるところとなりましょう。なぜならばもっぱらこの事実を認めないところから偏見が生まれるのですから。<sup>11)</sup>ところであなは、コーランの中でイエス・キリストを問題にしていない章はほとんどないということをご存知でしょう。さて、人は救世主の御名が発せられる至るところにおいてキリ

スト教の働きを見ない限り、また如何なる仕方であれ、キリスト教の教義に接しているすべての魂にキリスト教が影響を与えている事実を理解せぬ限り、贖いという偉大な業についてまったく理解していないことになり、キリストの王国の神秘が全然わかっていないことになるのです。言葉を変えて申すならば、贖いの恩恵を受けている人びとの中から、キリスト教徒を名のっている多くの人びとが除外されなければならないというわけです。もし以上のことがわかっていないならば、イエス・キリストの王国はじつにつつまらぬものになり、普遍的なキリスト教も取るにたらぬ一分派に墮してしまうのではないのでしょうか。

東洋の新しい宗教の出現によってもたらされた宗教的醸酵の結果たるマホメット教は、一見キリスト教に由来せぬものの代表のように見えますが、決してそうではないのです。したがって、マホメット教が諸民族の個々別々の利害をすべての人びとの救いという唯一の利害の中に持ち込むことによって、キリスト教社会の形成の否定的な役割を果たしたということと、アラブ人の文明がわれわれの文明の上に多くの物質をもたらしたということ以外に——そしてこれら二つの現象は、人類の復活のためによってとられたまわり道と見なさるべきものなのですが——われわれは、マホメット教がそれを信仰していた民族の精神におよぼした影響そのものの中に、この教えが由来せる教義の直接的な働きかけを認めなければならないのです。この場合、この教義は、真理の種子をより広範な地域に蒔くために、時代と所のいくつかの要求に順応したまでのことだったのです。自覚と確信とをもって主に仕えている人びとは、たしかに幸せな人たちです。しかしこの世の中には、みずからを動かしている至高の力について如何なる観念も持っていないのに、キリストの御言葉にしたがっている限りなく多くの人びとがいるということも忘れてはなりません。

今やわれわれに残されているのはホメーロスだけです。ホメーロスが人間精神におよぼした影響という点については、今日ではまったく疑問の余地がなくなっています。また現在のわれわれは、ホメーロスの詩がいかなるものであるか、よく知っています。ギリシヤ的性格は古代世界全体の性格を決定しましたが、ホメーロスの詩が如何なるやりかたでこのギリシヤ的性格を決定するのに寄与したかということも、われわれは、知っています。さらにまたわれわれは、この詩が断章でしか伝わっていない、もう一つ別の、より高く、より純粋な詩の代りであるということをも知っています。また彼の詩が、ギリシヤ以外の土地に生まれた以前の思想の代りに、新しい性質の思想を導入したということ、そしてこの新しい思想によって退けられた古い思想が、あるいはサモトラケ島の神秘の中に、あるいは他の忘れ去られた真理の殿堂の蔭にかくれて、この時以降もはやごく少数の信奉者のためにしか存在しなくなったということも、われわれは知っています。

11) 本来マホメット教徒はキリスト教徒に対して、何らの反感も持っていなかったのです。両者の間に憎悪や侮蔑が生まれるようになったのは、長期にわたる戦争の結果にほかなりません。キリスト教徒にとってみれば、最初彼らを偶像崇拜者と考え、ついでみずからの敵であると見なすようになったことは当然なことであったとも言えますし、また事実自分たちの敵になったのでした。(原注)

## 哲学書簡

す。<sup>12)</sup>しかし、ホメーロスがわれわれの生きているこの時代と共通のものを持っているということ、そしてそれが未だ普遍的な知性の中に存在しているということは、ほとんど知られていないように思われます。真の歴史哲学の関心は、まさにかかる点にこそ向けられるべきで、既に見てまいりましたように、歴史哲学の主たる研究は、歴史現象の永続的な結果や永遠の効果を探究することでこそあるべきなのです。

したがって、われわれにとってホメーロスは、いまだに彼自身が創り出した世界のタイフォンやアーリマンとおなじものにとどまっています。われわれの見るところ、情熱のもたらす破壊的なヒロイズムや、美についての汚らわしい理想だとか、現世に対する限りない執着だとかいったものは、すべてこれホメーロスから発しているように思われます。世界の他の文明社会には、決してこのようなものが見られなかったということは注意して下さい。悪徳と罪とをこのように理想化することを思いついたのは、ギリシャ人だけでした。悪の詩というものも、ギリシャ人と、彼らとその文明を継承した民族の中にしかなかったものです。ところでわれわれは、もしキリスト教徒の思想がそれを導くもの手に完全に委ねられたとしたら、如何なる方向をたどるかということ、中世の歴史の中にはっきりと見てとることができません。したがって、この詩はわれわれの北方の祖先から由来したものではあり得ません。北方人の精神はまったく異った性格のものであって、現世に対しては全然執着を持っていないのです。もしこの北方人の精神が、事実とは反対にそれだけでキリスト教と結びついたとしたならば、むしろそれは、みずからの夢みがちな想像力の雲の中に、迷いこんでしまっていたことでしょう。しかし、もはやわれわれの中には、彼らの血管の中を流れていた血は少しも残ってはいません。しかして今後われわれが人生の教訓を学ばんとするのは、カエサルやタキトゥスの描いた民族の間では決してなく、ホメーロスの世界の民族の間においてなのです。

つい先頃になって、われわれはみずからの過去へと目を向けるようになり、その結果自分自身の生まれてきたところへと戻って、父祖の遺産を少しずつ再発見するようになってきました。そこでわかったことは、われわれが北方民族から受け継いでえたのは、慣習と伝統だけだったということです。しかして精神は、もっぱら知識を養分とするものであって、この上なく根強い旧習も、ふかく根を張った伝統も、知識と結びつかないならば消え去ってしまうものなのです。ところで、宗教的な思想を除けば、われわれの思想がすべてギリシャ人とローマ人から来ているということも確かです。

さてホメーロスの詩は、古代の西欧において、人びとの思想の流れをあの偉大な創造の日の思い出から逸らせたわけですが、近代の西欧社会においても、それとおなじことをなしたのでした。それは、古代の科学や哲学や文学といっしょになってわれわれのところによって来て、きわめて巧みにそれらのものをわれわれの間に溶けこませたので、

---

12) ホメーロスの詩の影響は、もとよりギリシャ芸術の影響とまざり合っています。けだしそれは、ギリシャ芸術の典型だからです。換言するならば、ホメーロスの詩は芸術を創造し、ギリシャ芸術は彼の詩の影響を継承したのでした。ホメーロスの如き人物が、果して実際存在したかどうかという問題はわれわれにとってはどうでもよいことです。歴史批評といえども、ホメーロスの思い出を抹殺することは、決してできないでありましょう。したがって、哲学者が問題にすべきはこの思い出につながる思想であって、詩人の人物そのものではないのです。(原注)

現在のわれわれはどのような状態であれ、いまだ虚像と真実の世界を動揺しつづけているのです。人びとは今日ではほとんどホメーロスを問題にしていませんし、彼の作品を読むということもまずありませんが、それでも彼の神々や英雄たちは、依然としてキリスト教思想に対して異説を唱えています。このきわめて現世的・物質的で、われわれの悪徳に対して驚くほど寛容な詩の中には、たしかに並はずれた魅力があります。それは理性の糸をゆるめ、幻想や不思議な魅力によって理性を麻痺させるとともに、その力強い幻影によって理性をあやして、やさしく寝かしつけるのです。しかし、古代世界全体をはっきり理解するとともに、われわれの精神がキリスト教の真理に完全に服することから生まれたふかい倫理的感情が、われわれが未だかくも魅せられている人類の歴史におけるあの底抜け騒ぎの時代に対して、われわれの心を侮蔑と嫌悪で満たさぬ限り、更にまた、かくも長き間われわれが、かかる厭うべき偉大さや恐るべき徳や不純な美に対して愚かな尊敬を抱いてきたことを、ふかく反省し恥じとせぬ限り、古代の悪しき印象がわれわれの理性のもっとも生き生きとして活発な要素を構成するといった事態はなくなることでしょう。私の考えでは、われわれが啓示された精神によって完全に生まれ変わるためには、通常この地球上において物理的な大異変として経験されるような、なにか偉大な悔悟とか強力な罪ほろぼしとかいったものの必要性が、全キリスト教徒によってはっきりと痛感されなければなりません。私には、かかる贖罪なしに、今もってわれわれの思い出を汚している泥が拭い去られるとは考えられないのです。<sup>13)</sup>歴史哲学がホメーロスの詩をどのように理解すべきかは、以上申し述べてまいりました。このような観点から、歴史哲学がホメーロスの人間像をどのように考えるべきかは、ひとつ判断してみてください。彼の額の上に消しがたい不名誉の烙印を押すことが、以上のように考えたあとでも、歴史哲学の良心に恥ずるところとなるではありませんか！

奥様、今やわれわれは私たちの画廊の最後の個所へとやってまいりました。未だあなたに申しあげるべきすべてを言い尽してはおりませんが、筆を置かねばなりません。ところであなたは、次の一つの事実を御存知でしょうか。即ち、われわれロシア人には、ホメーロスやローマ人と共通なものは何ひとつないということ、そしてすべてこれらのものは、われわれにとって完全に無縁なものだということです。しかし、だからといってどうしょうもないではありませんか！ヨーロッパの言葉をうまく話すほかはないのです。われわれにはヨーロッパの思想がないにもかかわらず、われわれの持っている外来の文明は私たちをびったりとヨーロッパによりかからせているので、われわれには彼らの言葉しかなく、彼らの言葉で話すほかないというわけなのです。われわれの有する知的習慣や伝統や思い出が、如何に少ないものであろうとも、またわれわれの祖先が、たとえ私たちを地上の如何なる民族とも結びつけなかったにしても、更にまた、たとえわ

13) ホメーロスの詩によって汚されることのなかったこの新たな分野が、最近の歴史的省察の結果見出されたということは、われわれの時代の幸運なできごとだと言えましょう。インドの思想が哲学の発展に与えた影響は、すでにきわめて有益なところとなっています。願わくばこの回り路を通して、今までわれわれがより近い道を通しては到達することのなかった地点にまで、できるだけすみやかにたどりつかんことを！

われわれが事実上如何なる普遍的な道德体系に属さないとしても、われわれはその社会的  
生活様式の外見から言って、西欧と結びついています。この結びつきは、たしかに弱い  
ものですし、想像されるほどしっかりとわれわれをヨーロッパに結びつけるものでもな  
く、またわれわれの全存在にわたってヨーロッパで起っている偉大な運動を感じさせる  
ものでもありませんが、それにもかかわらずそれは、われわれの未来の運命をヨーロッ  
パ社会の運命に従属させているのです。ですからわれわれが、ヨーロッパと一体化せん  
と努力すればするほど、われわれの状態は向上することでしょう。われわれは今日ま  
で、まったく孤立して生活してきました。われわれが他の民族から学んだことも、私た  
ちの魂の内部に滲透することはなく、単なる装飾として私たちの外側を飾っただけ  
でした。しかし今日では、(ヨーロッパという)支配的な社会の力は実に強力なもの  
となり、他の民族に及ぼす影響力も広大な地域にわたるようになってきました。したが  
って、われわれもやがて、この全世界的な渦巻の中に身心ともに巻き込まれることにな  
りましょう。これは確かです。またわれわれが、今後とも長きにわたってこの不毛の地  
にとどまるということも、まずありますまい。さらばわれわれは、子孫のために新たな道  
を用意すべく、できるだけのことをしょうではありませんか。われわれは子孫に対し  
て、みづからが持っていない信念だとか、時間をかけて形成された理性だとか、はっき  
りといった個性だとか、活発で豊かな成果を有する長い知的生活の中で発達した所信だ  
とかを遺すことはできないのですから、せめて、たとえわれわれ自身が見出したもの  
ではないにせよ、何らかの伝統的要素をもった——そしてそのことによってわれわれ自身  
の思想より強さと豊かさを持った——世代から世代へと受け継がれる、いくつかの思  
想を遺そうではありませんか。こうすることによってわれわれも、後世に対して価値あ  
るものとなり、この地上において無為に過さなくともすむことになるであらう。

奥様、では失礼いたします。私のこの問題につきまして再び筆をとるかとりぬかは、  
まったくあなた次第でございます。互いによく理解しあえるような、うちとけた話し合  
いができますならば、一つ一つの思想を念入りに検討し、きわめつくすことも、別に必  
要ではありますまい。もし私の以上申しましたことが、あなたの歴史研究におきまし  
て、何か新しいことをお教えすることができ、ふつう人が見出すよりもよりふかい興味  
をかき立てることができますれば、満足これに過ぎるものはございません。<sup>14)</sup>

ネクロポリス、1829、2月16日。

14) この書簡を印刷に附すにあたって、読者の方々に、文体の弱さと、更に不正確さとお許し願わね  
ばなりますまい。外国語で執筆し、しかも文学上の自負などまったくない私は、この点について自分自  
身に欠けたところをよく知っております。しかし、まずもって現代においては、心得た読者は以前のよ  
うに形式に対して必要以上に重視することはないと考え、もしそれが役に立つものであるならば、たと  
え不完全ではあっても、ある叙述の奥から少々努力してでも思想を引き出すことを軽蔑するものでは  
ないと考えたのでした。更にまた、今日近代文明は、如何なる形をとるにせよ思想があまねく及ぶこと  
を求めているほど要求しており、ある人間が人類に対して何らかの発言を有する場合には、世界中に知  
れわたった言葉で語るべきであって、奇妙な方言で語るべきではなく、この場合に選択の余地はないと考  
えたのです。最後に、今日の文学界はきわめて寛大であって、さまざまな地方に住むすべての人びとに  
アカデミックなむずかしい公式用語を押しつけるようなことはなく、ある人間が真理を語ろうとするな  
らば、それが善きことか悪いことかはあまり問題にならないだろうと考えたのでした。われわれはまた  
以上のことを期待するものであります。(原注)

《第 八 書 簡》<sup>1)</sup>

奥様、今や理性の卒直なる言葉をもって語るべき時がまいりました。もはや人は盲目的な信仰や、心の期待のみにとどまるべきではありません。思想そのものに、直接立ちむかうべき時が来たのです。これら多くの不自然な欲望や、互いに対立し合う利害関係や、生活をとらえている心やすまらぬ不安の中に、感情だけでみずからの進むべき道をきりひらくことはできないのです。イギリスおよびフランスにあっては、生活はあまりにも複雑になり、利害に左右され、個人的なものになってきています。またドイツにおいては、それはあまりにも抽象的でかたよったものとなり、みずからの存在に固有な力というものを失っています。その他の国々については、目下のところ、語る必要もありません。今や人びとは、あらゆる可能性を考慮した上で、その解決がすべての精神にとって困難ではあるが可能なものであり、あらゆる傾向に適合し、いかなる実在の利益をも傷つけず、かくてもっともかたくなな知性をも惹きつけるような問題を、一つの課題として提出しなければならなくなりました。

しかしこのことは、感覚の対象が永久に思考の世界から取り除かれることを意味するものではありません。決してそのようなことはないのであって、いずれは再び取り上げられることになるでしょうが、その時になればわれわれも、これら感覚の対象が、かつてなかったほど強力にして広汎且つ純粹であることを認めることでありましょう。このような時が、間もなく到来するであろうことを、私は疑いません。しかし、目下のところ、かかる状況下においては、感覚に対してなにか強烈に魂をゆさぶるようなものは、何も与えられてはおりません。このことをしっかりと自覚することは、きわめて大切なことです。あの人類の青春時代が持っていた生き生きとした才能の、ある種の復活が今日認められるのは確かですが、しかしこれは、素晴らしい天気を告げる朝焼けでしかありません。現在のところ、平原は一面にうす暗い黒雲で覆われ、ただいくつかの峰々が暁の光に照り映えだしたにすぎません。

真理に対して無関心でありえない人びとにとっては、真理の明らかな徴候はすぐ目の前に存在しています。あなたは私がこの徴候という言葉で、どのような意味で使っているか御存知でしょうか。それは正しいやり方で研究された歴史的事実の総体を意味しています。今日必要なことは、これらの事実を調和のとれた全体とし、理解しやすい形で包むことによって、善だとか真理の発見だとかに対してまったく無関心で、すでに過ぎ去

1) 本書簡の翻訳は、先に訳出せる《第二・第三・第四・第五書簡》と同様に《Литературное Наследство》の第22—24巻に収録された、シャホフスコイのロシア語訳を底本とし、ファルクのドイツ語訳を参照してなされたものである。「スラヴ研究」No.6, P.70参照。(訳注)

## 哲学書簡

って二度と帰っては来ない過去の中で、未だまごまごしている人びとの魂にも感化を及ぼすような仕方で、それらを表現することです。これらの人びとにとって過去が生き生きとしたものを感じられるのというのは、彼らが今日という日を決して理解せず、過去の日々の中にとどまっている、怠惰で賤しい精神の持ち主だからです。

最終的な光明は、歴史の持つ普遍的な意味から出てこなければなりません。そしてこの意味は今後至高の心理の考えている方向へと導かれなければなりません。つまりこの場合人間の存在は、孤立し制限された個人としてではなく、即ち、もっぱら生死の法則のみに従うところの、生まれてきてはその日の中に死んでゆくといった、かげろうの如き存在としてではなく、抽象の世界における理性的存在として理解されなければならないのです。そうです。人は人類が実際なによって生きてきたかを明らかにしなければなりません。そして、すべての人びとに対し、精神的世界の奥深く存在し、目下のところある特別な光明なしには見ることのできぬ秘められた真実を示さなければならないのです。この場合人は、あまりにも排他的になったり、空想的になったり、図式的になったりしなければよいのであって、肝要なことは、古く理解されにくくなった教条的な言葉ではなく、時代の言葉をもって語るということです。このようになすならば成功は疑いありません。なぜなら現代においては、理性も科学も、芸術すらもが、救世主の偉大な時代と同様に、新たな倫理の変革をめざして努力しているのですから。

すでに私は、一度ならずキリスト教の真理が社会に及ぼす影響について語ってまいりました。しかし、すべてを言いつくしたわけではないのです。このことは信じにくいかも知れませんが、これから私が申しあげようとするのは、まったく新しい思想なのです。即ち、キリスト教の道徳的意義こそ十分に評価されてはいるものの、その純粋に知的な働きかけや、力強い論理の力となると、未だほとんど考慮されていないのです。さらに現代の思想が形成され発展してゆく過程でキリスト教が持った意義については、未だ何ひとつ言われてはおりません。目下のところ、われわれのあらゆる推論がキリスト教的なものであるということは未だ自覚されてはおらず、われわれは依然としてアリストテレスのカテゴリーと三段論法とをもって、自分を考えているのです。つまり、あたかも偏見や無学や狂信だけが絶大な力を持っていたあの頃の哲学者や背教者の絶えざる愚痴によって、われわれが信仰の働きというものがどれほどの恵みを与えるものであるかを見すごしてきたということが問題なのです。ですから不信仰の熱がさめた時になっても、きわめて敬虔にして謙虚な人びとは、すでにみずからの土地においてよそ者となっていましたし、自分の思想の中であらゆるものを再び正しい位置に据えるためには、非常な努力を要したのです。しかし、それでもこれらの人びとが、純粋に人間的な現実を学ぶために、当然持ってしかるべき興味を持っていないこともたしかです。彼らはこういったことを余りにも軽視しているのです。彼らは超人間的な行為を見ることに慣れているので、この世界の中で働いている自然の力には注目することもなく、知的現実の物質的諸条件はほとんど見すごしています。しかし、いずれにしても今や理性は、そのすべての力をキリスト教に負うものであることを認めねばなりません。そして、啓示によって与えられた特別の仕方を借りてのみ、また啓示が人間の思惟の全対象に持ち込

んだ生き生きとした明晰によってのみ、現代科学の堂々たる建物がうち建てられるのだということを、よく考えてみなければなりません。驕慢なる科学も、みずからが掛かる高さに迄到達し得たのは、もっぱらきびしい規則や確固とした原理によるものであること、そして何よりも、みずからがキリスト教の教えの中に見出した真理に対するはげしい本能的探究によるものであることを、ついには認めるに相違ないのです。

幸いなことに、もはやわれわれは、党派的な固執が確信だとか、宗派的な攻撃が信仰の念だとか見なされるような時代に生きておりません。したがって、うまく話し合えることが期待できるというものです。しかし、真理を譲るべきでないことは勿論です。そしてこれは決して礼儀に反するものではありません。正当な権威にとって、譲歩するということは、あらゆる積極的な役割を拒否することを意味し、それは自己を卑下することになりましょう。今ここで問題なのは、威信を保ったり、なにか外的な印象をどうこうすることではありません。いかなる威信もいつしかその意味を失い、幻想もやがては覚めます。ここで問題にしているのは、言葉をもって表現しうる以上の、きわめて実際に即したことがらです。即ちそれは、過去が未来を決定するという事実です。生命の法則とはこういうものです。みずからの過去を拒否するということは、みずからの未来を奪うことを意味します。しかし、キリスト教が迷いに落ちこんだこの三百年という歳日は、勝手に消そうと思っても消える思い出ではありません。したがって、離教した者たちは、みずからの思いのままにその未来を築くようになるかも知れません。ところで、太古からの共同体は、そもそもの初めから希望を持ち、みずからに約束された使命を信ずることによってのみ生きてきましたが、今日に至るまで、その未来については如何なる考えもなしに停滞しています。

しかし、何よりもまず、以下の一つの重要な事態を明らかにしなければなりません。即ち、地上に真理を保持するのを可能ならしめているものの中で、もっとも本質的なものの一つは、疑いもなく新約聖書です。人は地上に新しき秩序を打ちたてる真の典拠を含んでいるこの書物に対して、格別の尊敬を払わねばなりません。この書かれた言葉は口より発せられた言葉のように消え去るものではないからです。それは理性の上にみずからの印をきざみつけ、その不滅と神聖さの永続的承認を通して、理性をばきびしく従属させます。しかし同時に、言葉というものは精神を書き記すことによって、その可動性を奪い、精神を狭い書物の枠の中に押し込んで圧迫し、さまざまな拘束も加えます。聖書ほど宗教思想を高く飛翔させ、限りなく前進させるものはありませんが、人間の心の中にある、あまりにもかたくなな宗教思想ほど妨げになるものもありません。今では宗教生活において、すべてのものが言葉を基礎としていて、具現化した理性の真の声は沈黙しております。真理の説教台から響いてくるのは、力も権威もない言葉だけです。説教は善行の中の単なる偶然の現象にすぎなくなっています。しかし、われわれに伝えられた聖書の中の説教というものは、当然のことながら、それを聴く人びとに対してのみ向けられているという事実は、卒直に認めなければなりません。それはまた、あらゆる時代を通じて、すべての人びとに同じように理解されるはずのものでもありません。それは必然的に一定の場所的・時間的ニュアンスの相違を持つにちがいありません。そし

## 哲学書簡

てこのことは、聖書中の説教をしてある限界の枠内に押しこめることとなり、もしこの限界を破ろうとすれば、多少なりとも恣意的で、完全に人間的な解釈のたすけが必要となることでしょう。ですから、この古い言葉がかっての時代に持ち得たような、本当の話しぶりや実際の力とおなじ力を、常にこの世に伝えることがはたしてできるでしょうか。今や世界には新しい声が響き渡るべきではないでしょうか。かってはその呼びかけが誰にとっても無縁ではなく、地上のすみずみに至るまで等しく響き渡った言葉のように、今やこの新しい声は、歴史の歩みと結ばれ、その反響は世界のあちこちから負けじ劣らじと響いてこなければならぬのです。

あらゆる時代に向けられた言葉は、ただ救世主の御言葉のみではなく、光輪で覆われ血で染まり、十字架の上にはりつけにされた救世主のこの世ならぬ御姿でもあります。即ちそれは、一言で言うならば、かって神が人びとの記憶の中に永遠に刻みつけられたところのものにはほかなりません。かって神の御子が人びとに魂を与えて、みずからも永久に彼らの間にとどまるであろうと語られたとき、はたして彼は自分の死後作られたこの書物について思いをめぐらされたでありますか。その中において、うまく語られているにせよ、まずく語られているにせよ、彼の生涯と御言葉が記され、その使徒の幾つかの記録が集められているこの書物が、はたして自分の教えを永遠に地上にとどめることができるものであると、彼はお考えになり得たでしょうか。もちろん、このようには想像されませんでした。救世主が言わんとされたことは、自分の長所をよく学び、その教えや生涯の範例をしっかりと身につけた人びとが後から現われて、精神的に自分と一体化し、自分の全思想・全存在をば、手から手へ、世代から世代へと伝えるであろうということだったのです。彼はこのように述べんとされたのですが、人びとはそのようには理解せず、かくも屢々さまざまな解釈によって歪められ、恣意によって歪曲されたこの書物の頁の中に、あたかも彼の全遺産が見出されるとでも思っているのです。

(しかしこの書物が如何に役立ったにせよ、キリスト教がこの書物の助けを借りずとも確立したことは、御存知のとおりです。キリスト教はすでに二世紀から世界を征服したのです。しかしてこの時以降、人類は常にキリスト教に服してきたのでした。)<sup>2)</sup>

人びとはまた、この書物を世界中に普及させさえすれば、世界は真理をめざすであろうと想像しています。これこそ離教者が懸命に想像するあわれな幻想と言わねばなりません。

救世主の持つ神の理性は、われわれの如き、また彼御自身の如き人びとの間に生きていたのであって、決して教会によって作られた書物の中に存在するものではないのです。ですからこそ、聖餐式の中に実際に聖体が存在するのだという驚くべき教義に対する信者のつよい愛着や、救世主の聖体に対する彼らの限りない崇拜というものは、それだけ尊敬に価するところなのです。まさにこのことの中にこそ、キリスト教的真理の源泉が、どこよりもよく現われています。われわれの理想としての、また新しき人類に対

2) ジャホフスコイの解説によれば、この括弧の中の文章は書簡の末尾にあったが、そこでは文意がはっきりせず、この箇所の方が適当なので、ここに挿入したとのことである (Литературное Наследство, т. 22-24. стр. 78)

する永遠の教えとしてのキリストの偉大な御姿を、たえずわれわれの目の前に置いておくために、あらゆる可能なやり方でキリストを実際にわれわれの間に存在させ、そのうつし身をたえず呼び起さなければならない理由も、このことの中にはっきりと示されています。私は、このことは深く考えるに価することだと思っています。しかし、幾人かの賢者は、この人びとから嘲笑され軽蔑され意地の悪い攻撃にさらされている聖餐式に関する独特の教義を、汚されることなく、確固たるものとして保持しています。ではこのことはいったい何を意味するのでしょうか。それは、キリスト教のさまざまな教えが、やがては一体化するのに役立つがためではないのでしょうか。それはまた、未だ目下のところ運命の神秘の中にかくされている新しい光が、いずれは現われんがためではないのでしょうか。私はこのことを疑いません。

人間の思想の中に刻まれた刻印が、精神的世界の不可欠の構成要素であることは認めねばなりません。精神と理性的存在の全体的発展との融合の基盤は、実は別の生き生きとした言葉の中にこそ含まれているのです。そしてこの言葉は、時代や国や人びとの間で形を変えることはあっても、説明も解釈も必要とはせずにその真のあるべき姿で存在し、その正当性は経典にもとずいて擁護する必要もないものなのです。これこそわれわれの思想の自然な道具であります。ですから、プロテスタントが言うような、一卷の書物の中にすべての叡智が含まれているという主張は、正しからざるものであって、哲学とはなんの関係もないものです。他方、人びとにより純粋な真理の根源やそれほど世俗的ではない別の権威を認めさせるところの、これらの確固たる信仰の中には、疑もなく、より高き哲学が存在しているのです。

われわれは、この自己自身を確信し、人びとの間に正しい姿で存在するキリスト教的理性を評価しなければなりません。それは真理に対する本能であり、行為から意識の領域に移された精神的原理を遵守する態度であり、無意識の中にもこの原理にかなった論理的思考をなすことであります。キリスト教を創られた方によってこの地上にもたらされた生活をはっきりと理解し、自己犠牲の精神や分裂に対する憎悪や合同に対するはげしい渴望を持つことこそ、キリスト教徒をして、周囲の汚れに染まらさずにおくのです。かくしてこそ、発見された高き思想は保たれ、またこの思想を通して、さまざまな魂と倫理的な力とが一つの魂に、一つの力に融合するという、偉大な業がなされるのであります。しかしてこの融合こそ、キリスト教の全使命にほかなりません。真理は一つです。神の国、地上の天国、福音の約束、すべてこれらは人類の全思想が一つの思想に統一されることを予想させ、実現させるものであります。しかしてこの唯一の思想こそ神の思想にほかならず、換言するならば、実現された道徳律にほかならないのです。そして自覚せる世代のなすべき仕事こそ、あらゆるものの終局的な目標であり、人間の最終的な段階であり、世界劇の終幕であり、偉大な黙示録的シンテーゼたる、この究極的行為を惹起すことであります。

## 解 説 (4)

以上「解説」(1) (2) (3)を通して、われわれはチャアダーエフの八篇からなる「哲学書簡」の成立の過程をたどってきた。つぎに残された課題は、言うまでもなく、これらの「書簡」の中に述べられている彼の思想を、各方面からひとつひとつ詳細に検討することである。この作業は別の機会にゆずるが、ただ、今まで「解説」の中であとづけてきたチャアダーエフの思想上の歩みとの関係で一言するならば、これら八篇の「哲学書簡」を論ずるにあたっては、彼がその後1837年に執筆した「狂人の弁明」(Apologie d'un fou)なる一文をも、つねに考慮に入れておかなければなるまい。なぜならば「哲学書簡」、とりわけ「第一書簡」の中で、あれほど痛烈にロシアの過去と現在を否定しきったチャアダーエフ自身が、この「狂人の弁明」においては、つぎのように述べているからである。

「われわれが他の民族よりおくれて来たということは、彼らよりもよくなさんがためであり、彼らの過ちや失敗や迷信に陥らないためであると私は考えます。われわれほど恵まれていない諸民族によってなされた多くの愚かしい行為を、われわれがすべて不器用にくりかえし、彼らが経験したすべてのわざわいを、再びわれわれが始めなければならぬと考えることは、私の見るところでは、われわれに与えられた役割を奇妙に無視することのように思われます。このように、彼らの誤りを学ぶことができるということは、われわれの置かれている状況が恵まれていることだと私は考えるのです……」<sup>1)</sup>

即ち、ここにおいてチャアダーエフは、ロシアが西欧先進社会よりもおくれた歩みをしてきたという事実は、彼らのおかした誤りを学びとることによって、むしろプラスの要素に転ずることができるのだと主張しているのである。しかもこのような見解が、「第一書簡」の発表された翌年に述べられたということは、両者の結論の相違をより目立たせることになり、同時代の知識人や後世の史家の間に、チャアダーエフの思想的変節や転向を云々するものが出たとしても、それはある意味できわめて当然であったと言わねばなるまい。しかし、すでに「解説」(1)において述べたように、この「第一書簡」の執筆はすでに1829年の末になされたものであって、「狂人の弁明」の執筆までには六年余の歳月が横たわっている。しかしてこの間において、つとにコワレが指摘しているように<sup>2)</sup>、チャアダーエフの思想が、友人たるスラヴ主義者たち、就中イヴァン・キレエフスキーの影響を受けて発展した(コワレは、この発展は *evolution backward* と呼べるかも知れないと言っている)ということも十分考えられるところである。

しかし、それよりも、本質的に重要なことは、すでにこの「狂人の弁明」に結実する

1) Сочинения и Письма, Т. I, стр. 230

2) Alexandre Koyré, "Russia's Place in the World; Peter Chaadayev and the Slavophiles," *The Slavonic Review*, Vol. V, 1926-27, pp. 594-606

彼の思想の萌芽とも言うべきものが、「第一書簡」につづく他の七編の書簡、とりわけ「第六・第七書簡」に読みとれるという事実である。即ち、これらの「書簡」の中で彼は、西欧社会が遺産として継承してきた古典・古代の文明や、ルネッサンス・宗教改革の伝統を、「物質的なもの、個人的なもの」として否定的に評価し、ロシアはそれらの有害な伝統から免がれていると述べているからである。ところで、周知のように、これら古典・古代の文明や、ルネッサンス・宗教改革の成果というものは、次の時代におけるスラヴ主義者と西欧主義者の論争の過程で、ロシアと西欧社会とを区別する重要な基準となった概念であり、大ざっぱに言って、前者はこれを否定的に、後者はこれを積極的に評価したのであった。だとすれば、「西欧主義者」と称せられるチャアダーエフも、この重要な一点において、スラヴ主義者と見解を等しくしていたことになり、コワレの言う思想的影響も、より深い根を——即ちチャアダーエフ自身の思想の中にひそむ根を——持っていたことがわかる。しかし、チャアダーエフが「初期の西欧主義者」の一人にかぞえられるのは、言うまでもなく、そのカトリシズムの擁護といった面が重要な理由となっている。だが、この点についてもわれわれは、チャアダーエフの聖書の読みかたや宗教観が、正統な神学者の態度とはいじりしく異なるものであるのを見てきた（「解説」(3)）。さらに「哲学書簡」全編を通じて見られる、ある意味ではきわめて恣意的な彼のカトリシズムの理解に加うるに、結局のところチャアダーエフ自身カトリックに改宗しなかったという事実をもあわせ考えるとき、われわれは、チャアダーエフにおけるカトリシズムというものが、決して正統的な神学者のそれではなく、彼がロシア文明との対比において西欧文明の特質の中に見出さんとしたところの、文明をして持続的なものたらしめる一つの理念にすぎなかったのではないかと、結論することができるのである。

西欧主義とかスラヴ主義とかいう概念が、単純に急進主義とか反動とかいう概念に等置できないことは改めて言うまでもないが、個々の思想家についても、はたして彼が西欧主義者であったかどうかということは、簡単にレッテルをはることはできないという例を、以上の事実は示している。これはまた、次の世代の思想家たるゲルツェンについても言えるところである。周知のようにゲルツェンは、ロシアの過去と現在を否定しつつも、スラヴ主義者が見出した農村共同体と「ロシアの若さ」とを基盤として、そのユニークな「ロシア的社会主义」の理論に到達したのであった。この場合において重要なのは、彼がスラヴ主義者から思想的に影響を受けたということよりも、彼が西欧先進社会に比してロシアが圧倒的に立ちおけている事実をはっきりと認識した上で、いわば現実に対する「否定」を通して、主体的に未来への「希望」を打ち出したということである。しかしてチャアダーエフにおける「おくれの有利」という思想も、このゲルツェンの発想法とまったく軌を一にしていたことを、われわれはここで確認すべきである。しかればこのような発想法を生み出したものはいったい何であったのかというならば、それはゲルツェンにおいてもチャアダーエフにおいても明瞭に見てとれる、あのパトリオティズムにはかならない。そしてこのパトリオティズムが行間に秘められていたからこそ、チャアダーエフの「哲学書簡」は、次の世代の、ともにパトリオットたる、スラヴ

哲 学 書 簡

主義者と西欧主義者との論争を惹起し得たのであった。

\* \* \*

「解説」の最後にあたってチャアダーエフに関する参考文献について一言すると、1930年代初頭までのものは、Quénetの以下の書にほとんど細大もらさず記載されているので、その後出版されたものの中から、筆者が直接目を通すことのできたものを出版された順にあげておく。

- (1) Charles Quénet, *Tchaadaev et les lettres philosophiques. Contribution à l'étude du mouvement des idées en Russie*, Paris, 1931
- (2) A. von Schelting, *Russland und Europa*, Bern, 1948
- (3) В. В. Зеньковский, *История русской философии*, Т. I, Paris, 1948
- (4) Alexandre Koyré, "*Petr Tchaadaev*," *Etude sur l'histoire de la pensée philosophique en Russie*, Paris, 1950, pp. 19-102.
- (5) Heinrich Falk, *Das Weltbild Peter J. Tschaadajews nach seinen acht "Philosophischen Briefen"*, München, 1954.
- (6) *Очерки по истории философской и общественно-политической мысли народов СССР*, Т. I, М. 1955
- (7) П. С. Шкуринов, П. Я. Чаадаев, М. 1960.
- (8) Л.А. Филлиппов, "Религиозная утопия П.Я. Чаадаева и современные теологии," *История СССР*, 1961, №6.
- (9) J. Lavrin, "*Chaadayev and the West*," *The Russian Review*, 1963, Vol. 22, No. 3
- (10) R.T. MacNally, "*Chaadayev's Evaluation of Western Christian Churches*," *The Slavonic and East European Review*, 1964, Vol. XLII, No. 99